ISSN 0916－2631

愛知学院大学論叢

愛知学院大学

教養部紀要

第69巻　第１・２合併号

論　文

山　口　　均：コロナ禍の中の囲碁授業……（ 1 ）

Masamichi WASHITAKE：Reading Materials for Learning to Read Scientific Papers:
A Suggestion from A Systemic Functional Perspective……（ 19 ）

糸 井 川　　修：ベルタ・フォン・ズットナーの文学について
――『機械時代』の文学批評を手掛かりに――……（ 35 ）

菅　原　研　州：乙堂喚丑に係る『戒壇指南』の研究
――附録『戒壇指南』翻刻資料――……（ 70 ）

2022

愛知学院大学教養部

コロナ禍の中の囲碁授業

山　口　　均

キーワード：コロナ禍、オンライン授業、囲碁

愛知学院大学の囲碁授業概要

朝日新聞2018年７月12日朝刊に次のような記事が掲載されている。

ボードゲームの囲碁を授業で教える大学が増えている。原動力は、低迷する囲碁人口のＶ字回復をねらう日本棋院。2005年に東京大で初めて開講し、現在は関西棋院の提携校も合わせると京都、早稲田、慶応など40大学に広まった。「ゲームを覚えて単位が取れる」と学生に人気だ。（以下略）

愛知学院大学もこの「40校」のうちの一校で、教養部開講科目として2016年度から開講されている。科目名は便宜上「教養セミナーⅢ」としてあり、２年次生以上が受講でき、春学期と秋学期に同一内容で開講され、2018年からは新キャンパス完成に伴い二つのキャンパスでそれぞれ週一コマが開講されている。授業の性格上上限30名としてあり、抽選によって受講者を選ぶことも多い。講師は、日本棋院中部総本部所属のプロ棋士である山森忠直七段（2021年現在）で、山森七段は2017年４月からは愛知学院大学特任准教授も務めている（日本棋院発行の『週刊碁』2016年５月２日号、中日新聞2016年12月７日夕刊には授業風景の写真入りの記事が掲載されている）。

当該授業のシラバスには、まず「テーマ」として「プロ棋士に学ぶ囲碁の基本――囲碁を通

して思考力・判断力・分析力・集中力を養う」と書かれていて、「授業の概要」は次のようになっている（一部略、囲碁授業で先行する名古屋大学などの例を参考にして日本棋院中部総本部と相談の上作成した）。

まったく囲碁を知らない方を対象とします。（中略）ゼロから始めて19路盤で対局ができるまでにします。
囲碁は、手順を踏めば誰にも親しみやすい世界です。
ルールは極めて単純、それなのに奥が深い。人類が作り出した最高の知的ゲームです。

また「授業の到達目標」にはこう書かれている。

囲碁をまったく知らない人が、プロの囲碁棋士の指導により基本ルールを学ぶことで、６路盤と９路盤での練習を通じて、途中からは19路盤で対局ができるようになります。
思考力・判断力・分析力・集中力を養成し、さらには伝統文化に触れることで「礼儀」も身につきます。

半期15回の授業の構成は次のようになっている（概要）。

①囲碁の世界の紹介・６路盤によるゲーム
②基本ルール解説・囲碁用語解説・対局
③基本ルール解説・詰碁・対局
④基本ルール解説・死活・対局
⑤囲碁のテクニック（1）・死活・対局
⑥囲碁のテクニック（2）・指導碁
⑦囲碁のテクニック（3）・序盤の打ち方・模範碁解説・対局
⑧囲碁のテクニック（中級）・模範碁解説・対局
⑨囲碁のテクニック（中級）・プロ棋士実戦解説・対局
⑩19路盤による実戦
⑪競技会（９路盤）
⑫ AI 碁解説・対局（19路盤）
⑬ペア碁（19路盤）
⑭プロ棋士の実戦解説・対局（大局感を身に付ける）

⑮教員による受講生全員への指導碁・授業まとめ

シラバスの「概要」にあるように、この授業は「まったく囲碁を知らない」ことが受講条件になっているが、そういう受講生が手順を踏んだ授業を積み重ねることで「19路盤」つまり普通の囲碁対局ができるようになるのである。

COVID-19

教育界に限ったことでもなければ、日本だけでのことでもないが、2020年は「混乱と混迷」を極めた一年であった。COVID-19、いわゆる新型コロナウイルスの世界的な蔓延である。

多くの大学同様に、愛知学院大学も春学期はごく一部の開講科目を除いて全面的に「遠隔（リモート・オンライン）授業」を強いられた。遠隔授業については、朝日新聞の別刷版「EduA」2020年5月24日号には「実践してみたら発見がいくつも」との見出しの元、次のような意見が紹介されている。

> 当初から講義という形態をそのままネットに持ってきてはいけないと思っていた。オンライン授業は良くも悪しくも「奥行き」がない。大教室だと質問や学生からのコメントはほとんどないが、オンラインでは教員と学生の距離が縮まる。これからどんどん進化させていきたい。（鈴木寛・慶應義塾大学総合政策学部教授）

> 顔が見えない、空気感を共有できないという最初の違和感を乗り越えると、学生と1対1でかなりパーソナルな「対話」ができる。前よりコミュニケーションが取れる。学生は時間があるので知的好奇心が高く、フィードバックが多い。（阿部公彦・東京大学文学部教授）

これも事実であった。稿者は英語演習科目と講義科目（「英語圏の文化と社会」）を担当しているが、とりわけ英語科目では当初は教員側にも学生側にも戸惑いはあったものの、オンデマンド教材に工夫を凝らすことで、学生側も授業への参加意欲が高まり、その結果教員側でも従来にはなかった「手ごたえ」を強く感じることができた。この点では、まさしく阿部公彦氏が述べている通りであった。

しかし、である。本稿が扱っている「囲碁」は、将棋やチェスと並んで、ある意味「究極の対面型競技」である。もちろん、近年はインターネットを利用したリモート対局も普通になってきているが、それも実際に対面型の対局を何度も体験した上だからこそできることだと思う。

川端康成に『名人』という小説がある。明治から昭和初期にかけて活躍した本因坊秀哉名人が病身をおして対局した引退碁の様子を実際に観戦した著者が、川端文学特有の冷徹な観察眼で一部始終を活写した、緊張感あふれる作品で、囲碁を題材にした文学作品として名作の誉れが高い。その中に、次のような一節がある。

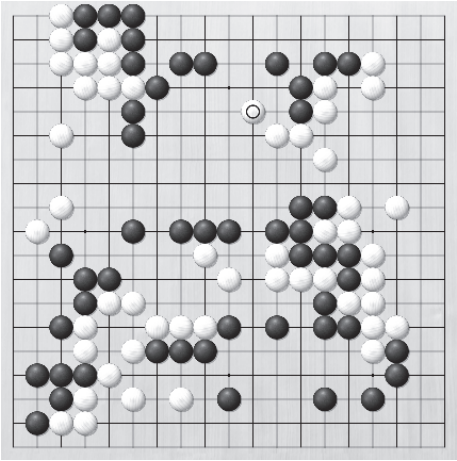
（前略）名人は目をつぶったり、横を見たり、また時々吐き気をこらえるように下を向いたり、いかにも苦しげだ。姿にいつもの力がない。逆光線でみるせいか、名人の顔の輪郭がぼうとゆるんで、幽鬼じみる。対局室もいつもの静かさと静かさがちがう。九十五、九十七とつづけて盤に打ちおろす石の音が、空谷にひびくように凄い。（新潮文庫版、27頁）

「身体感覚」と呼びたい。対面でボードゲームをする時の感覚のことである。囲碁なら、碁笥（ごけ、碁石の容器）の中に手を入れて、つるつるとした碁石を一つつまみ上げ、木製の碁盤に、時には石音高く置き、時にはあえて音を立てずに滑らすように指先から離すのである。そのような対面での実戦を経験しているものには、川端の描写は「感覚」として容易に訴えてくる。

春学期授業

2020年４月になってもCOVID-19は全国的な蔓延が続き、愛知学院大学は教室での対面式授業は困難と判断して、当初最初の３回の授業はオンライン（オンデマンド）で行うことを決定し、その後春学期はすべて遠隔授業となった。前項で述べたように、究極の「対面型競技」である囲碁授業にとって大きな困難が予想されたが、次のような授業内容で乗り切ることができた。

最初の項で述べたように、この授業は全く囲碁というものを知らないことを受講条件としている。そのため、当然、初回は囲碁のルール（囲碁規則）の説明から始められる。



この図は、実際の対局のものであり、これを「棋譜」と呼ぶ。棋譜には著作権がある場合も多いので、稿者が囲碁 AI と対局したものを使用している。いわゆる「途中図」であり、白石にマークが付けられているものが最新着手点であり、この場合102手目にあたる。囲碁の知識がない者には、どうしたらこのような展開になるのか皆目分からないが、それなりの経験があれば進行はある程度推測できる。

当然のことながら、対局はルールに従って進められている。ところが、囲碁は結果的に極めて複雑な「図形」を作り上げるが、その基本ルールは逆に極めて単純であり、数あるボードゲームの中でも最も単純であると思われる。日本棋院と関西棋院が平成元年に共同で作成した「日本囲碁規約」は全14条からなるが、それを稿者なりに極限まで単純化すれば次のようになるだろうか。

①黒と白が交互に盤面の交点に石を置く
②囲った相手の石は取り上げる（最後に相手の交点を埋めるのに使う）
③交点（「地（じ）」）が多い方が勝ち

これ以外に、「着手禁止点および例外」もルールの一つに数えられるが、これは②を敷衍することで理解できる。また、実戦対局をする時の規則に同型反復を避けるための「効（こう）」があるが、ここでは説明を省くことにする。

②と③は、こういうものだ、と覚えればいいので、そうすると囲碁の基本ルールは実質①「交互に交点に石を置く」ということだけになる。これは、もう一つの代表的なボードゲームである将棋に比べても格段に単純である。逆に、この単純さが複雑さに繋がり、それが将棋に

比べて囲碁へのとっつきにくさとなっているとも言われている。（ルール①は、秋学期の囲碁授業でリモート対局ができるようになるきっかけとなったが、それについては本稿後半で紹介したい。）

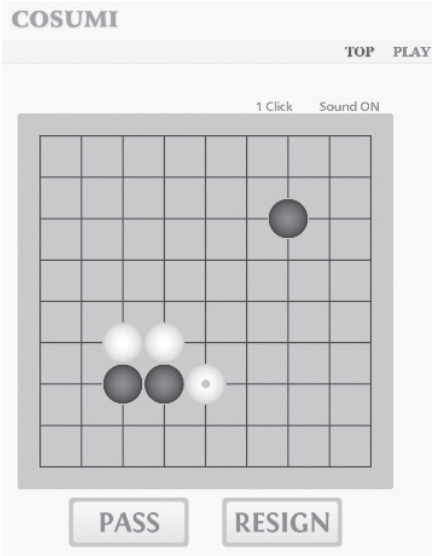
さて、授業では基本ルールを理解してもらうために、何題かの「練習問題」に取り組んでもらう。詳細は省くが、部分的な形を示して、次にどこに石を置くのが正しいかを答えてもらう。教材を PDF 形式などで配布して、受講者には直接答えを書き込むなり記号で答えるなりしてオンラインで返送してもらい、のちほど解説を加えた。また、囲碁ルール解説サイト「やさしい囲碁入門講座」（https://yasashiigo.com/）を紹介し自宅学習での復習・確認に役立ててもらった。

最初の数回はこれで乗り切った。

だが、やはり「対局」という、一番手っ取り早い「囲碁体験」は難しかった。

本稿の最初でも述べたように、近年はインターネットを利用したリモート対局も普通になってきていて、操作も簡単なのだが、アプリケーションをダウンロードする必要があること、場合によっては会員登録が必要になっていること、普通は多くの人が集まる仮想空間で行われ特定の人（授業の場合は出席学生）と対局するのが難しいこと（できないわけではない）もあり、授業で使うことはためらわれた。

それで考えたのが、インターネット上で囲碁プログラム（囲碁 AI）と無料で対局できるサイトを利用することである。広く利用されているサイトの一つに「COSUMI」（https://www.cosumi.net/）がある。当該サイトには「COSUMI は対コンピュータ囲碁フリーゲームと入門者向けの囲碁のルール解説をメインのコンテンツとした、囲碁初心者のウェブサイトです」と書かれている。ここでは、最小の碁盤である 5 路盤から、通常の対局に使用される19路盤までが用意され、 9 路盤以上なら棋力を数段階で選ぶことができるようになっている。

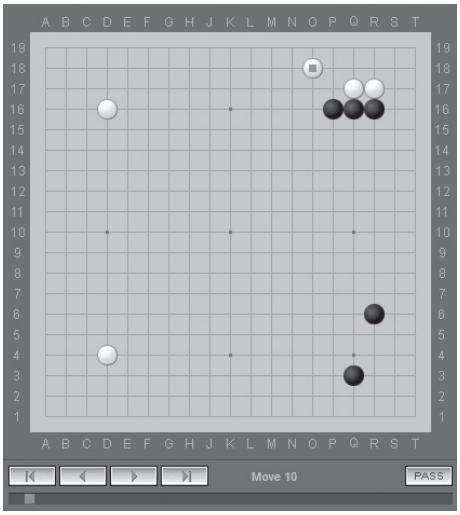


これが画面で、受講学生には簡単な操作方法を指示したうえで、各自対局してもらった。対局の実際については、教室でなら教員が机間巡視をしてそれなりにアドバイスすることもできるが、それができずに対局の内容は知りようがないのが問題だが、最低限の「囲碁経験」は体験できたと思う。なお、このサイト以外にも適宜「ロボット対局」（https://www.nihon-netigo.jp/）なども利用した。

教室での対面授業なら、9路盤（交点数81）を使いしばらく学生同士で対局した上で、13路盤（交点数169でそれなりに本格的になる）へと進むのだが、2020年度春学期は断念せざるをえなかった。局面が複雑になり、教室での個別の指導がない場合は淡々と囲碁AIと対局を続けるだけにしかならないからである。

19路盤、すなわち囲碁の普通の対局で使われる碁盤を使っての体験をしてもらうため、例年はまずプロ棋士同士の対局棋譜、韓国棋院のトップ棋士と囲碁AI「アルファ碁」との伝説的とも言われる対局、あるいは日本棋院の仲邑菫初段（当時、2021年現在二段）と囲碁AI「GLOBIS-AQZ」との対局などを部分的に解説して、その後教室での受講生同士の対局練習、競技会、最後の15回目で講師による全員への指導碁を行っていたが、2020年度春学期はそれができなかった。

そこで工夫したのが、インターネットで「疑似体験」をしてもらうことであった。ウェブサイト「棋譜ぅ」（http://www.kihuu.net/）にはプロ棋士の対局棋譜が多数掲載されているが、このサイトでは画面上のボタンをクリックすることで1手目から順にそれをたどることができる。



実際の19路盤での対局では総手数が300に及ぶことも多いが、それを体験させることにはこの時点では意味がないので、適宜棋譜を指定して（URL を指示）、例えば「60手」「105手」など進行がひと段落するまでを指定して体験してもらった。その際、例えば上の画像では白が「O18」に石を置いたところだが、「あなたなら次はどこへ打ちますか」を考えながら進めていけばかなり対局の感覚がつかめるのではと考えた。

以上が、2020年度春学期「コロナ禍の中の囲碁授業」の試行錯誤だった。

秋学期授業

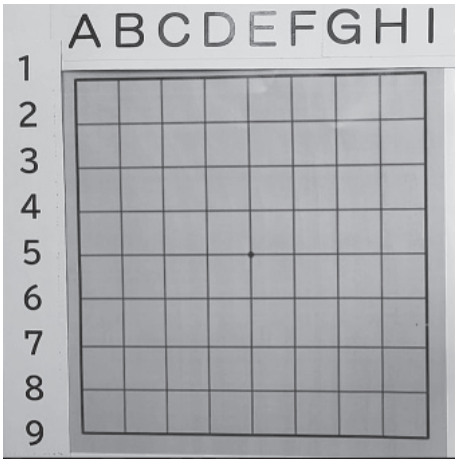
愛知学院大学の秋学期は、対面授業を主としながらも、科目によっては春学期同様の遠隔授業、あるいはその二つを組み合わせた「ハイブリッド型」授業形式となったが、囲碁授業は授業形式の特殊性から春同様の全面的に遠隔授業となった。

ただ、秋学期になって遠隔授業の環境で大きく変わったことがある。それは、リモート会議用のアプリケーションである「Microsoft Teams」（以下 Teams）が、春学期の「試行段階」を経て本格的に導入されたことである。Teams はもともとビジネス用途を主目的としているので、用語も「授業」ではなく「会議」になっていたりするのが当初は気になったが、大学が開催した教職員向けの講習会などを通してそれなりに使いこなせるようになると、リアルタイムオンラインにしろオンデマンドにしろ受講学生に直接話しかけることができるようになったのは大きな変化だった。Teams は極めて高機能・多機能なアプリケーションであるが、その一部に習熟するだけでも授業環境が変わったのである。（なお、全国の大学では Zoom の方が採用数は

多いかもしれない。愛知学院大学は全教職員、そして全在学生に Microsoft 365を提供している関係で Teams 採用となったと思われる。）

とは言いながら、囲碁の授業では、春学期同様「対局」という壁は乗り越えられないので、当初は Teams を利用することはなかった。ところが、二つのことが遠隔授業で受講学生との「対局」を可能する道につながった。一つは、動画撮影機能の付いた書画カメラの導入であり、もう一つは Teams の解説書を読んでいくうちに知った「画面共有」での「制御権」という付加機能である。

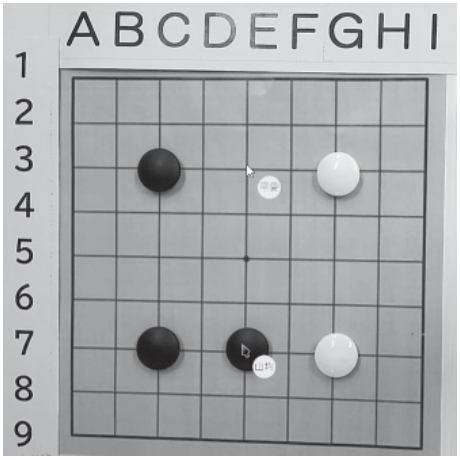
まず「書画カメラ」から説明したい。通常の遠隔授業では、PC の内蔵カメラで教員の顔を映して受講生に話しかけ、時々背後の黒板などを文字の大きさなどに留意した上で映し出し、あとはプレゼンテーションソフトで授業を進める、という形が多いと思う。実際の対面型授業はもっと動的で立体的なものだと思うが、やむを得ないのかもしれない。ところが、書画カメラを外付けカメラとして追加して、手元の資料のみならず、教室の風景など、適宜切り替えると本来の立体性が取り戻せることが分かった。そしてここから発想したのが、外付け書画カメラで手元の碁盤を映しだすことだった。



受講学生はパソコンでの視聴だけでなく、タブレットあるいはスマートフォンでの視聴も想定されるので、この画像のような 9 路盤が大きさとしては適当かと考えた。実際に教員が石を置く時の「石の音」もマイクが拾うので、前項で述べた「身体感覚」も共有することができそうだった。しかしながら、まだこの段階では遠隔授業を受けている受講学生は「こちら側」にやってくることができない、つまり対局はできない。

Teams を使っての授業（会議）で「画面共有」という機能は効率的な進行には欠かせないが、そこに「制御権を渡す」という「サブ機能」があることに注目した（Zoom では「リモート制

御」がこれにあたる)。簡単に言えば、授業（会議）主催者の PC 上のアプリケーションを出席者が遠隔のまま操作できる機能である。ここではこの機能の詳細について説明することはしないが（必要がない)、注目したのは、制御権を渡された出席者のマウスポインターが共有画面に表示されるという、とても単純な事象である。



画像で下段に表示されているのが教員側のポインター、上段に見えるのが制御権を「許可」された出席者のポインターである。愛知学院大学の初期設定ではこの画像にあるように教職員の場合は漢字二文字（「山均」「山忠」「勝高」「平愛」など)、学生の場合は漢字一文字のアイコン画像が表示されるようになっている。

ここで本稿の「春学期授業」の項で述べた囲碁ルールについてもう一度考えたい。つまり、囲碁の対局ルールを極限まで単純化すれば、二人の対局者が「交互に交点に石を置く」ということであった。ここから遠隔授業での「対局」への道筋が見えてきた。以下「手順」を示す。

①書画カメラで碁盤を映して「画面共有」をする
②対局をする受講学生を指名して「制御権を要求」してもらい「許可」する
③例えば置き石を 2 子として、まず白（教員）が実際に碁盤に打つ
④黒（受講学生）は打ちたい場所（交点）を共有画面上でポインター（アイコン画像）で指し示す
⑤教員がその交点に黒石を置く
⑥終局後、制御権を戻してもらい、次の学生と交代する

文章化すると手間のかかりそうに思える手順だが、実際はとても簡単な作業である。囲碁の

対局には、テンポとかリズムのようなものが必要だが、⑤に慣れると、対面での対局とそれほど変わらない感覚で打つことができる。「制御権」という硬い言葉とは裏腹に、単にポインター（アイコン画像）を共有画面で動かすだけの動作なので、受講学生側にも操作の負担をかけることがまったくないと言える。なお、他の受講者は画面共有で対局を鑑賞することになる。

当初、Teams の「チャット機能」を利用することも考えた。先ほどの手順④で、例えば「D3」などと交点を指定してもらって対局するのである。ただし、これだと文字入力が必要となり、教員側がその都度それを視認することになるので、ポインターで指し示す方がはるかに直感的で自然な対局ができた。

交互に交点に石を置いていく、囲碁のその「単純さ」が最大限価値を持ったのである。

二面打ち

前項の要領で、かなりスムーズにリモート対局ができたので、次に遠隔で出席している学生同士の対局を試みた。手順は次の通りである。対局者はAさんとBさんとして、先手後手（黒番白番）も指定しておく。

①書画カメラで碁盤を映して画面共有をする
②黒番のAさんに制御権を要求してもらい許可する
③ Teams では制御権を渡せるのは一人に限られるので、Bさんにはマイクを使い声で交点を指定してもらう（例「C5」）
③教室にいる教員が、Aさんのポインター、Bさんの声による指示に従い石を置く

これで普通に対局できた。さすがに前項の教員と制御権を持った受講学生との対局ほどのテンポは望めないが、それでも進行に不自然さを感じない程度の対局が可能だった。9路盤の場合、学生同士の対局だと一局10分程度かかるが、90分授業のうち60分をあてれば遠隔でありながら10人以上の相互対局ができることになる。

ここまで試行してみて、次に考えたのが「二面打ち」である。「二面打ち」とは、同時に二人と対局することで、いわゆる指導碁で多く打たれる。これが可能になると、受講生が多い場合でも遠隔指導対局の進行ができるようになる。手順は次の通りである。指導碁の対局者はCさんとDさんとする。

①９路盤を二つ並べ（碁盤１、碁盤２）、それを書画カメラで映して画面共有をする
②Cさんに制御権を要求してもらい許可する
③碁盤１で、Cさんとはポインター指示の方法で対局する
④碁盤２で、Dさんには声で交点を指示してもらい、教員（もしくは授業アシスタント）がそこに石を置く

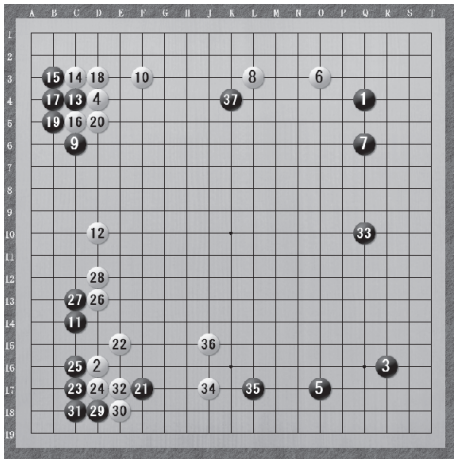
この方法も、ある程度スムーズに進行させることができた（④ではアシスタントがいたほうがテンポよく進行できる）。９路盤の指導碁なら、一局10分以内で可能なので60分をあてれば12名の受講生と指導対局できることになる。

秋学期授業では、最終的に13路盤でのリモート対局（指導碁）までを実践することができた。受講学生の囲碁体験も春学期とは比較にならないほどの深さがあったように思う。

「Kiin Editor」を使ったリモート対局

実は、秋学期の授業がすべて終了したのちに、別な方法でもっと容易にリモート対局ができることに気づいた。それは、画面共有した囲碁ソフトの棋譜入力機能を使って、実戦対局する方法である。

Kiin Editor は日本棋院が無償で公開している棋譜入力・再生ソフトである（Windows 版のみ）。



適当な対局棋譜を並べてみた（便宜上石番号を表示してあるが、非表示設定もできる）。Kiin Editor は無料のソフトでありながら多機能で、形勢判断・手順検討などもできるが、ここ

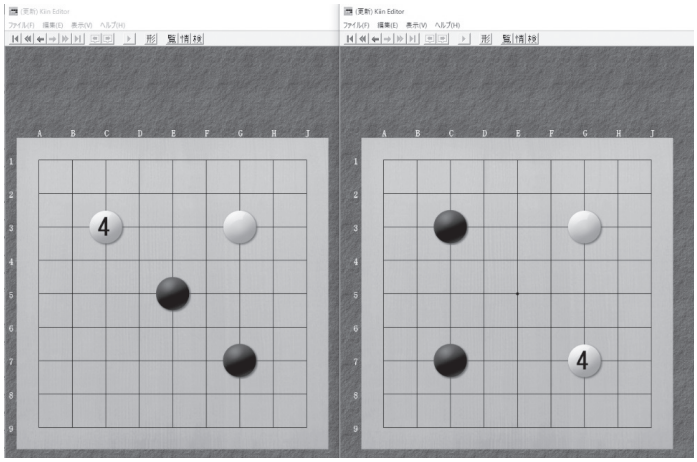
ではその説明は省くことにする。囲碁 AI が入っているわけではないので、「対局」はできない（はずである）。

しかし、Teams を利用すると「人対人のリモート対局」が可能であることに気づいた（逆に「リモート」以外の対局はできない）。以下、手順を示す。

① Kiin Editor を起動して、Teams の会議（授業）で画面共有する
②対局相手に制御を要求してもらう
③相手も Kiin Editor の盤面をクリックして石を置くことができるようになるので、交互にクリックして対局をする

すでに書画カメラを使用して、遠隔授業に出席している受講学生と対局する方法を実践していると、「手順」とも言えないほどの、なんともあっけない簡単な方法である。とりわけ③が画期的だった。実際にリモート対局を試してみたが、自然なテンポで、リズム感をもって対局できた。マイクをオンにしておけば、まるで目の前にいる相手と対局しているような感覚になる。

続いて「二面打ち」も試してみた。これも容易だった。



この画像は Kiin Editor を同時に二つ起動して左右に並べたものである。これもすでに授業で実践した方法を使うと簡単に指導碁の二面打ちが可能となる。左側碁盤 1 では受講学生 E さんに制御権を渡して普通に対局し、右側碁盤 2 では F さんに音声で交点を言ってもらい、教員がそこに石を置く。実際の碁盤碁石ではないので、教員側もクリックのみの動作でよく、この場合はアシスタントがいなくても指導碁の進行が負担なく行える。Kiin Editor には棋譜再生・

検討機能があるので対局を終えてからの解説も容易である。

どうして、こういうことが可能になるのか。それは、Teams の仕様である「画面共有」と「制御権」が、実は本稿の最初で述べた囲碁の基本ルールと共通する概念を持っているからである。

今更ながら「囲碁」とはどういう競技だろうか。「碁盤を挟んで、交互に石を置く」、これが単純化の極致である。言い換えれば「画面共有と、交互の制御権」ではないだろうか。つまり、「碁盤という画面」を共有し、交互に石を置くという「制御権」をやり取りするのである。それに加えて、上下左右が等価値を持つ盤面の交点に石を置くという「見かけ上の単純さ」によってリモート対局が可能になる。

今になっては不思議な気持ちもするが、囲碁と言う伝統的なボードゲームとコロナ禍の中で注目された Teams という最新のアプリケーションが、実は親和性がとても高かったのである。

以上、「コロナ禍の中の囲碁授業」の実践報告と、今後の可能性を述べてみた。本稿で示した「手順」が「過去の実践記録」となることを強く願いながらも、「コロナ禍の中の囲碁授業」の大きな可能性も信じたい。

2021年春学期授業（追記）

実は、前項までは2020年度終了後に書き上げたものである。

その後2021年４月になって、報道の「トップニュース」では COVID-19陽性者数の発表が続いたものの、愛知学院大学では感染予防に留意した上での教室での対面式授業が始まった。しかし、その後の感染拡大を受け、まず５月中旬から四週間の「半数隔週登校」による授業形式になり、さらなる状況悪化を受け、５月末から四週間は「原則遠隔授業のみ」へと変更を余儀なくされた（６月末からは４月の体制に戻された）。

当然、囲碁授業も遠隔で行うほかはない。

ただ、2020年度と異なる点が二点あった。

一つは、受講学生がすでに教室での対面授業で実戦対局を始めていること、もう一つは本稿最後で述べた「Kiin Editor を使った遠隔対局」という授業方法を考案済みだったということである。

すでに実戦対局を経験済みの受講学生にオンラインの向こう側で「孤独」に授業に参加してもらうことは「逆戻り」になってしまうところだったが、Kiin Editor を利用した授業形態はかなりスムーズに進行させることができた。（なお、受講学生が時間中になるべく多く実戦対局

を行うことができるように、当該科目担当教員である山森忠直七段に加えて、勝股高志教養部教授と本稿執筆者山口均も授業進行に加わった。また、オンライン対局に加えてオンデマンド教材での課題も提示した。）

「Kiin Editor を使った遠隔対局」は、手順を文章化しようとするとやや煩雑になるが、実際は学生によるアプリケーションのダウンロードなども不要で、受講学生には Teams の「制御権」のことだけ理解してもらえばいいので、とても容易だった。簡単に実践例を書くと次のようになる。

教員一人の担当学生が 8 名とする。本文で述べた「二面打ち」を行う。教員が学生と対局する「指導碁」の場合は、次のようになる。

学生 A さんは制御権を使って碁盤 1 で対局し、学生 B さんはマイク音声で交点を指示して教員が碁盤 2 で対局する。 9 路盤の場合は、一回の対局に要する時間は10分弱として、「検討」と呼ばれる対局の振り返りを少し加えて、 8 名全員が40分程度で一通り指導碁を受けられる。時間に余裕があればもう一巡が可能である。

Kiin Editor は純粋な棋譜入力・再生ソフトでありながら、最終的な地合（陣地の広さ）計算も瞬時にでき、全画面表示機能を使えば「検討」も容易で、教員側の負担も比較的軽かった。

特筆したいことがある。

「画面共有」と Kiin Editor での対局を組み合わせた場合、他の囲碁対局アプリケーションを利用した場合と異なり、教員および授業に「出席」している受講学生全員が対局を「共有」することが可能になったのである。

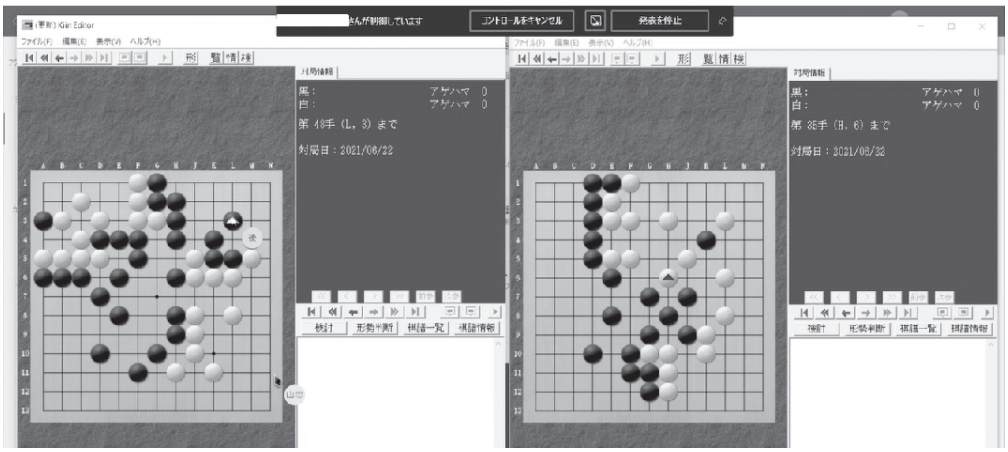
受講学生同士の対局の場合は、次のようになる。最初は一面打ちとする。

学生 C さんが制御権、学生 D さんがマイク音声で交点を指示して教員が代わりに石を置く。教員側としては、これはとても簡単な授業進行だった。学生同士の対局の場合は、一局15分程度かかるので、 8 名全員が対局するのには60分かかることになった。そこで、一部実験的に学生同士の対局でも同時に碁盤二つを並べることも試行してみた。手順は次の通りである。

学生 E さんは制御権、 F さんはマイク音声で碁盤 1 で対局、G さんと H さんはマイク音声で碁盤 2 で対局する。間違いを防ぐために、必ずこの順番（ F G H ）でマイク音声で交点を指示してもらい、それに従って教員が石を置いていく。さすがに教員側が慌ただしく、少し進行速度は遅くなったが、授業の録画を閲覧し直してみてもそれほどの違和感は感じられなかった。

Kiin Editor を使った遠隔対局では、最終的に13路盤での対局経験まで進むことができた。次

の画像は山森七段による13路盤指導碁二面打ちの例である。



本論中で述べたように、９路盤が交点数81であるのに対して13路盤では169となり、かなり本格的になり、そのため対局時間も長くなる。ここでも Kiin Editor の「形勢判断」機能を使って、その時点でどちらがどの程度優位に立っているかなどを数字で示すことができるので、「打掛け」（対局を途中で中止すること）になった場合でも、受講学生はそれなりの終局感を得ることができたように思う。

予想外だったことがある。

例えば、指導碁二面打ちの場合、８名出席として対局者２名以外の受講学生は局面の進行を「観戦」することになる。当初、これが少し退屈な時間になる可能性も心配されたが、実際は他人の対局を横から観戦することが受講学生たちの棋力向上に大きくつながったのである。教室での対局の場合は各自の対局にかかりきりで、他の対局がどのように進行しているかを参照する余裕はあまりない。ところが、画面共有で「Kiin Editor を使った遠隔対局」の進行を見守り、終局後、山森七段を始めとした指導教員による「良い手悪い手」の指摘を聞くことで、それを次の対局に活かせるようになった。これは、一昨年までの教室での一斉対局では見られなかった傾向である。つまり、先に述べたように、対局を「共有」することが可能となったのである。あえて言えば、「画面共有」を超える「体験共有」とでもいうべき時間だったのかもしれない。

本稿の前項までを３月に書き上げた段階では、2021年度には「Kiin Editor を使った遠隔対局」を実践せずに済むことを願っていたが、COVID-19の感染状況はそれを許してくれなかった。

その中で愛知学院大学教養部の囲碁授業は、ぎりぎりのところで、川端康成の『名人』に読み取れる「身体感覚」を保ちつつ、「究極の対面型競技」である囲碁の対局を通じて、「プロ棋士に学ぶ囲碁の基本――囲碁を通して思考力・判断力・分析力・集中力を養う」という所期の目標の一端にはたどり着けたのではないだろうか。

以上、「コロナ禍の中での大学授業」の実践報告の一例としたい。

注

愛知学院大学囲碁授業の科目担当教員は山森忠直日本棋院七段（教養部特任准教授）だが、2016年の開講当初から勝股高志教養部教授（中国語教室）と山口均（2021年度から教養部客員教授、英語教室）がアシスタント教員として教室の授業に参加してきた。2020年度からの遠隔授業実施にあたっては、両名が授業方法について提言を行った。

本稿はそれに基づき、山森忠直七段の授業内容を元に山口が執筆し、山森七段に適宜修正をしてもらい、勝股教授にも意見を求めて最終稿とした。

困難な授業形態を強いられる中、「コロナ禍の中での囲碁授業」の実験・実践を行っていただいた山森七段、そして「仮想空間での対面授業」に積極的に参加していただいた学生の皆さんに謝意を表したい。

主要参考文献

石倉昇・梅沢由香里・黒瀧正憲・兵頭俊夫『東大教養囲碁講座』（光文社新書、2007）［愛知学院大学囲碁授業の指定教科書］

王銘琬『棋士と AI ――アルファ碁から始まった未来』（岩波新書、2018）

王銘琬『世界の囲碁ルール』（日本棋院、2019）

大橋拓文『よくわかる囲碁 AI 大全』（日本棋院、2017）

川端康成『名人』（新潮文庫、1962）

『Microsoft Teams 実用技大全』（日経 BP、2020）

『Microsoft 365 Teams 活用術』（メディアックス、2020）

Reading Materials for Learning to Read Scientific Papers:

A Suggestion from A Systemic Functional Perspective

Masamichi WASHITAKE

Abstract

This paper proposes abstracts of *Nature Reviews* as reading materials for Japanese university students who need to read scientific papers. It explores three sample abstracts of *Nature Reviews* from the perspective of Systemic Functional Linguistics. As a result of the exploration, this paper makes it clear that 'thing' as participant, nominalization and metaphorical realization of logical relation can cause difficulty in reading. These lexicogrammatical problems are often observed in scientific papers and Washitake (2021) has suggested solutions to them. However, some problems observed in abstracts of *Nature Reviews* are easier to resolve. In addition, abstracts of *Nature Reviews* are easier to approach than scientific research papers since the articles are generally written as accessible, introductory overviews. Thus, this paper concludes that abstracts of *Nature Reviews* are ideal materials for learning to read scientific papers because of their lexicogrammatical characteristics and approachability.

Key words: Systemic Functional Linguistics, the language of science, categories of 'things', nominalization, metaphorical realization of logical relations

1. Introduction

Students in Japanese universities have to read scientific research papers in their specialized courses, sometimes without adequate training. There are quite a few guides on how to read scientific papers and so many studies on the language of science (e.g., Böttcher, 2017; Halliday and Martin, 1993; Martin and Veel (eds), 1998; Halliday, 2004a; Banks, 2008). However, few studies have examined on the ways to approach the language of science. This present paper proposes abstracts of *Nature Reviews* as reading materials for learning to read scientific papers. It explores three abstracts of *Nature Reviews* from the perspective of Systemic Functional Linguistics, and illustrates lexicogrammatical characteristics of them. By this text

analysis, this paper makes it clear why these manuscripts are useful for university students in Japan to improve their English ability to read scientific papers.

I explored a significant number of abstracts of *Nature Reviews* and found that they can be proper reading materials to help students improve their English abilities to read scientific papers. There are practical reasons for that: 1) in both abstracts of *Nature Reviews* and scientific papers, general, abstract and metaphorical things serve as participants; 2) the organization of nominal groups in abstracts of *Nature Reviews* are complex, which contributes to the high value of lexical density, a major problem when reading scientific papers; 3) logical relations in abstracts of *Nature Reviews* are often metaphorically realized, which is characteristically seen in the language of science; 4) clause complexes in both text types are fairly simple; and finally, 5) for 'ordinary' English teachers, reading reports on *Nature Reviews* is quite difficult but understanding their abstracts seems possible with some specialists' help.

The purpose of this paper is to help students who are not familiar with reading scientific papers. The research question is this: are abstracts of *Nature Reviews* proper reading materials in advance of students' reading scientific papers? Thus, the results of lexicogrammatical analyses of them are compared with those of scientific papers.

2. Exploring Abstracts of *Nature Reviews*

Manuscripts in *Nature Reviews* are edited to make original research comprehensible and to show introductory overviews of scientific fields (nature.com). The manuscripts are still technical and are not intended for lay readers. However, their abstracts are, as far as I read, understandable with some help of specialists.

This section explores three abstracts from *Nature Reviews*: Example 1 is extracted from *Nature Revies Drug Discovery*, Example 2 from *Nature Reviews Cancer*, and Example 3 from *Nature Reviews Cardiology*. All of them are free access and available on the Web.

Example 1

mRNA vaccines represent a promising alternative to conventional vaccine approaches because of their high potency, capacity for rapid development and potential for low-cost manufacture and safe administration. However, their application has until recently been restricted by the instability and inefficient *in vivo* delivery of mRNA. Recent technological advances have now largely overcome these issues, and multiple mRNA vaccine platforms against infectious diseases and several types

of cancer have demonstrated encouraging results in both animal models and humans. This Review provides a detailed overview of mRNA vaccines and considers future directions and challenges in advancing this promising vaccine platform to widespread therapeutic use.

(Pardi, N. et al., 2018)

Example 2

Detection of cancer at an early stage when it is still localized improves patient response to medical interventions for most cancer types. The success of screening tools such as cervical cytology to reduce mortality has spurred significant interest in new methods for early detection (for example, using non-invasive blood-based or biofluid-based biomarkers). Yet biomarkers shed from early lesions are limited by fundamental biological and mass transport barriers — such as short circulation times and blood dilution — that limit early detection. To address this issue, synthetic biomarkers are being developed. These represent an emerging class of diagnostics that deploy bioengineered sensors inside the body to query early-stage tumours and amplify disease signals to levels that could potentially exceed those of shed biomarkers. These strategies leverage design principles and advances from chemistry, synthetic biology and cell engineering. In this Review, we discuss the rationale for development of biofluid-based synthetic biomarkers. We examine how these strategies harness dysregulated features of tumours to amplify detection signals, use tumour-selective activation to increase specificity and leverage natural processing of bodily fluids (for example, blood, urine and proximal fluids) for easy detection. Finally, we highlight the challenges that exist for preclinical development and clinical translation of synthetic biomarker diagnostics.

(Kwong, G. A. et al., 2021)

Example 3

Cardiac rehabilitation is a complex intervention that seeks to improve the functional capacity, wellbeing and health-related quality of life of patients with heart disease. A substantive evidence base supports cardiac rehabilitation as a clinically effective and cost-effective intervention for patients with acute coronary syndrome or heart failure with reduced ejection fraction and after coronary revascularization. In this Review, we discuss the major contemporary challenges that face cardiac rehabilitation. Despite the strong recommendation in current clinical guidelines for the referral of these patient groups, global access to cardiac rehabilitation remains poor. The COVID-19 pandemic has contributed to a further reduction in access to cardiac rehabilitation. An increasing body of

evidence supports home-based and technology-based models of cardiac rehabilitation as alternatives or adjuncts to traditional centre-based programmes, especially in low-income and middle-income countries, in which cardiac rehabilitation services are scarce, and scalable and affordable models are much needed. Future approaches to the delivery of cardiac rehabilitation need to align with the growing multimorbidity of an ageing population and cater to the needs of the increasing numbers of patients with cardiac disease who present with two or more chronic diseases. Future research priorities include strengthening the evidence base for cardiac rehabilitation in other indications, including heart failure with preserved ejection fraction, atrial fibrillation and congenital heart disease and after valve surgery or heart transplantation, and evaluation of the implementation of sustainable and affordable models of delivery that can improve access to cardiac rehabilitation in all income settings.

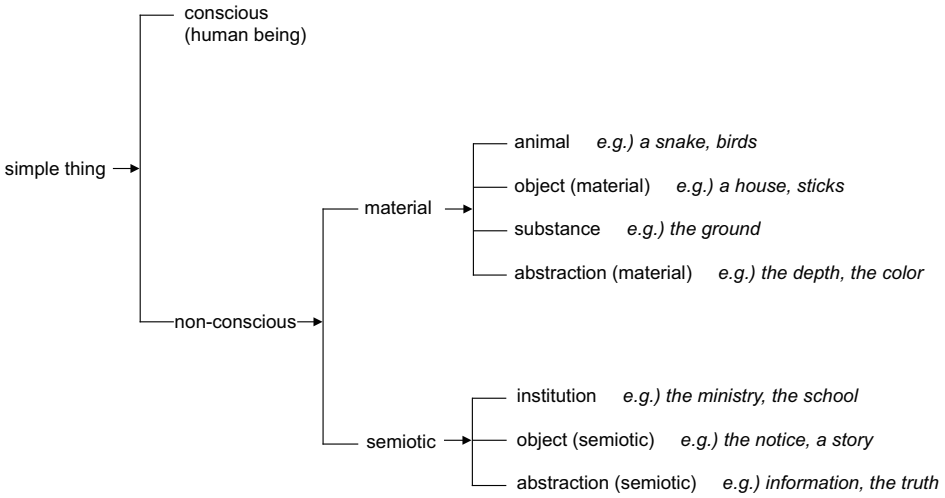
(Taylor, R. S. et al., 2021)

2.1 Things as Participants

As an English teacher, I have found that quite a few students who are good at reading ‘story genres’ (Martin and Rose, 2008) are not familiar with the genre of reports and explanations which scientific papers exploit. Presumably, this is partly because in story genres, conscious participants participate in events, while in reports and explanations, general, abstract and even metaphorical things (i.e., nominalization) serve as participants. Thus, one of the barriers that students face in reading scientific papers seems to be types of ‘things’ as participants.

Halliday and Matthiessen (1999: 182–196) illustrate categories of simple thing as participants (‘simple’ in that they are not ‘metaphorical’). Figure 1 shows a taxonomy of simple thing. The primary distinction is whether the thing is conscious or non-conscious: typically, conscious things are adult humans, who can serve active participants and can participate in conscious processes; while non-conscious things are things other than humans and are further categorized. Non-conscious things are either material or semiotic. Material has four subcategories: animal (e.g., a snake, birds), object (material) (e.g., a house, sticks), substance (e.g., the ground) and abstraction (material) (e.g., the depth, the color). Semiotic has three subcategories: institution (e.g., the ministry, the school), object (semiotic) (e.g., the notice, a story) and abstraction (semiotic) (e.g., information, the truth).

Figure 1: The taxonomy of simple things



(adapted from Halliday and Matthiessen, 1999: 190)

For example, in Example 1, *mRNA vaccines* is a non-conscious - material - object thing; *This Review* is a non-conscious - semiotic - object thing.

Participants such as *their high potency*, *capacity for rapid development* and *potential for low-cost manufacture and safe administration* are quite different type of things: they are not 'simple' thing but 'metaphorical' things.

It seems helpful to give a short sketch of 'metaphorical' realization. The term, 'metaphorical' is often discussed with 'congruent'. In the model of Systemic Functional Linguistics, sequences (a series of events) are 'congruently' realized by clause complexes; figures (events) by clauses; and logical relations between figures by conjunctions. For elements making up figures, participants are congruently realized by nominal groups; processes by verbal groups; and circumstances by either adverbs or prepositional groups. However, these congruent realizations can be expanded when 'shift' and 'fusion' happen: figures and elements other than participants can be 'metaphorically' realized by nominal groups. These metaphorical realizations are called 'grammatical metaphor' and especially, metaphorically nominalized expressions are called 'nominalization' (for detailed discussion on grammatical metaphor, see e.g., Butt et al., 2012; Halliday, 2014; Halliday and Matthiessen, 1999; Simon-Vandenbergen et al. (eds), 2003; and Thompson, 2014). In section 2.2 and 2.3, I will discuss how grammatical metaphor work in examples.

According to the classification, I analyzed types of things in example texts. Table 1 shows a provisional analysis of types of 'things' in Example 1:

Table 1: Types of 'thing' as participant in Example 1

nominal group	*type of 'thing'*		
mRNA vaccines	non-conscious	material	object (material)
a promising alternative to conventional vaccine approaches	non-conscious	material	abstraction (material)
their high potency	metaphorical		
capacity for rapid development	metaphorical		
potential for low-cost manufacture and safe administration	metaphorical		
their application	metaphorical		
the instability and inefficient *in vivo* delivery of mRNA	metaphorical		
Recent technological advances	metaphorical		
these issues	non-conscious	semiotic	abstraction (semiotic)
multiple mRNA vaccine platforms against infectious diseases and several types of cancer	non-conscious	material	abstraction (material)
encouraging results in both animal models and humans	non-conscious	material	abstraction (material)
This Review	non-conscious	semiotic	object (semiotic)
a detailed overview of mRNA vaccines	non-conscious	semiotic	object (semiotic)
future directions and challenges in advancing this promising vaccine platform to widespread therapeutic use	non-conscious	material	abstraction (material)

Here I list some characteristics of types of things shown in Table 1:

Characteristics of types of 'things' in Example 1

(a) Nominal groups are either non-conscious or metaphorical.

(b) In both material and semiotic, abstraction tends to form large and complex nominal groups.

(c) Metaphorical things are used.

As space is limited, instead of showing full analysis of Example 2 and 3, I list some comments on the result.

Characteristics of types of 'things' in Example 2

(a) As observed in Example 1, in both material and semiotic, abstraction tends to form large and complex nominal groups.

(b) As observed in Example 1, metaphorical things are used.

(c) Conscious thing, *we* is used three times as either Sayer or Sensor.

(d) A clause is rankshifted to serve as a 'macro-thing', which is not typical in the language of science.

Characteristics of types of 'things' in Example 3

(a) As observed in Example 1 and 2, in both material and semiotic, abstraction tends to form large and complex nominal groups.

(b) As observed in Example 1 and 2, metaphorical things are used.

(c) As observed in Example 2, conscious thing, *we* is used as Sayer.

In the example texts, abstraction and metaphorical things tend to be realized by large and complex nominal groups. In the next section, I will analyze the organization of nominal groups in the example texts.

2.2 The Organization of Nominal Groups

Abstracts of *Nature Reviews* are complex in that the value of lexical density is quite high. Lexical density is the proportion of content words to the text (Halliday, 2002). It can be measured as the number of lexical words per clause. According to Halliday (2004b: 33), an ordinary value of lexical density in casual speech is 1–2 and that in technical writing is 6–10. The values of lexical density in extracted texts that I have counted are: 10.8 in Example 1; 12.6 in Example 2; and 17.0 in Example 3. The high value of lexical density is due to the complexity of nominal groups. In this section, I will analyze the organization of nominal groups in example texts.

A nominal group in English can be interpreted as Figure 2.

Figure 2: An interpretation of a nominal group

text	these	two	splendid	old	electric	trains	with pantographs
function	Deictic	Numerative	Epithet		Classifier	Thing	Qualifier
			Attitude	Quality			
class	determiner	numeral	adjective	adjective	adjective	noun	prepositional phrase

(adapted from Halliday, 2014: 388)

According to this interpretation, for example, *a promising alternative to conventional vaccine approaches*

from Example 1 can be interpreted as follows: *a* serves as Deictic; and *promising* serving as Epithet and *to conventional vaccine approaches* serving as Qualifier modify *alternative*, Thing (see Figure 3).

Figure 3: An interpretation of a nominal group in Example 1

text	a	promising	alternative	to conventional vaccine approaches
function	Deictic	Epithet	Thing	Qualifier
class	determiner	adjective	noun	prepositional phrase

To take another example, *an emerging class of diagnostics that deploy bioengineered sensors inside the body to query early-stage tumours and amplify disease signals to levels that could potentially exceed those of shed biomarkers*, one of the most complex nominal groups in Example 2 can be interpreted as Figure 4.

Figure 4: An interpretation of a nominal group in Example 2

text	an	emerging	class	of	diagnostics	that deploy bioengineered sensors inside the body to query early-stage tumours and amplify disease signals to levels that could potentially exceed those of shed biomarkers
function	extended Numerative (Variety)				Thing	Qualifier
	Deictic	Epithet	Thing			Embedded Clause Complex
class	det.	adjective	noun	prep.	noun	defining relative clause

In this example, *an emerging class of* functions as extended Numerative, where the head noun is a word of measure or type (Halliday, 2014: 394). Here, the noun, *diagnostics* serving as Thing is delimited in terms of variety. In addition, an embedded clause complex, *that deploy bioengineered sensors inside the body to query early-stage tumours and amplify disease signals to levels that could potentially exceed those of shed biomarkers* serves as Qualifier.

Since this embedded clause complex is intricate, it might be helpful to interpret it (see Figure 5). In this clause complex, the dominant clause (notation: α), *that deploy bioengineered sensors inside the body* is qualified by reference to result (notation: ×β), *to query early-stage tumours and amplify disease signals to levels that could potentially exceed those of shed biomarkers*. In the dependent clause, the initiating clause (notation: 1), *to query early-stage tumours* is followed by the continuing clause (notation: +2), *amplify disease signals to levels that could potentially exceed those of shed biomarkers*. Types of relationship between clauses will be illustrated and discussed in section 2.4.

Figure 5: A clause complex analysis of the Qualifier

that deploy bioengineered sensors inside the body	to query early-stage tumours	and amplify disease signals to levels that could potentially exceed those of shed biomarkers
α	×β	
	1	+2

High value of lexical density and complex nominal groups are characteristics of scientific papers (Washitake, 2021). In his discussion of choosing reading materials toward academic reading, Washitake (forthcoming) also discusses that complexity of nominal groups in scientific papers is not typically derived from the complexity of Qualifier. However, since he discusses general tendency, it seems a hasty to conclude that the analyses shown in Figure 4 and 5 contradict his suggestion.

Metaphorical things, such as *their high potency*, *capacity for rapid development* and *potential for low-cost manufacture and safe administration* (from Example 1) may require further analysis. There are a number of merits of nominalizations: it can 'freeze that event in time and make it an object that participates in a different sort of Process' (Butt, et al. 2012: 99); and 'turning an event into a noun offers opportunities to point out, count, describe, classify and specify further and further' (Butt, et al. 2012: 99). On the other hand, however, nominalizations often keep non-specialists away from the discourse because they tend to make discourse abstract and 'denser'.

A way to approach this problem is 'unpacking' texts (Halliday 2004b). For example, the nominalizations can be unpacked to more 'congruent' form, i.e., to clauses: *their high potency* can be unpacked as *they are highly potential (vaccine approaches)*; *capacity for rapid development* can be unpacked as *(mRNA vaccines) can be developed rapidly*; and *potential for low-cost manufacture and safe administration* can be unpacked as *(mRNA vaccines) can be manufactured at low cost and administered safely*.

Nominalizations realized by more complex nominal groups such as *Detection of cancer at an early stage when it is still localized* and *patient response to medical interventions for most cancer types* (both are from Example 2) are sometimes cannot be unpacked properly without special knowledge in the field in question. For example, *Detection of cancer* can be unpacked either as *(doctors) detect cancer* or *cancer detects (something)*; and in *patient response to medical interventions for most cancer types*, *response* and *intervention* are too abstract for laypersons to be unpacked.

Another problem with nominalization is that there are such nominalizations as *cardiac rehabilitation* and *heart failure* (from Example 3). According to Halliday and Matthiessen (1999: 261), this type of nominalization *was* a grammatical metaphor but 'the metaphorical quality has since been lost, or at least

significantly weakened': its metaphor is 'dead' and cannot be unpacked. Thus, *cardiac rehabilitation* and *heart failure* are congruent forms and are treated as just technical expressions.

To solve problems regarding nominalization and 'dead' metaphor, English teachers may have to ask for specialists' support. Still, the support seems limited compared with what English teachers need when reading scientific papers.

Typically, metaphorical expressions are exploited as a series of 'syndrome': they cooperate with each other to *re*construe experience. In the next section, I will illustrate how metaphorical realization of logical relations are related to nominalization.

2.3 Metaphorical Realization of Logical Relations

As mentioned earlier, nominalization is not the only grammatical metaphor. Relator that relates two clauses can also be metaphorically realized. Relator is congruently realized by conjunction such as *because* and *if*. However, it can be metaphorically realized by other grammatical classes. As Halliday and Matthiessen (1999: 244–267) and Halliday (2004b: 40–43) illustrate, there is a general principle of metaphoric shift: relator can be realized by preposition, verb, adjective and even noun. Figure 6 shows the direction of metaphorical shift.

Figure 6: The direction of metaphorical shit (italic: *example*)

relator (conjunction)	circumstance (preposition)	process (verb)	quality (adjective)	thing (noun)
			unstable →	*instability*
		transform can →		*transformation possibility*
	with →			*accompaniment*
so →				*cause/ proof*
		is increasing used to →	*increasing previous*	
	for a long time →		*lengthy*	
then →			*subsequent*	
	(be) instead of →	*replace*		
then →		*follow*		
when →	*in times of*			

(adapted from Halliday, 2004b)

In example texts, the following metaphorical realizations of logical relations are observed:

(1)
mRNA vaccines represent a promising alternative to conventional vaccine approaches because of their high potency, capacity for rapid development and potential for low-cost manufacture and safe administration.

(from Example 1)

(2)
Detection of cancer at an early stage when it is still localized improves patient response to medical interventions for most cancer types.

(from Example 2)

(3)
The success of screening tools such as cervical cytology to reduce mortality has spurred significant interest in new methods for early detection (for example, using non-invasive blood-based or biofluid-based biomarkers).

(from Example 2)

In (1), a logical relation is realized by the prepositional phrase consisting of the prepositional group, *because of* and three nominalizations. The relator in this logical relation can be, more congruently, realized by a conjunction *because* and the three nominalizations can be unpacked as analyzed in section 2.2. Thus, this text can be unpacked as follows:

(1) unpacked example
mRNA vaccines represent a promising alternative to conventional vaccine approaches because they are highly potential (vaccine approaches), they can be developed rapidly and they can be manufactured at low cost and administered safely.

In (2) and (3), logical relations are realized by a verb and a verbal group, *improves* and *has spurred* respectively instead of more congruent form, conjunctions. In these clauses, nominalized expressions *The success of screening tools such as cervical cytology to reduce mortality* and *significant interest in new methods for early detection* serve participants that participate in the processes. (3) can be unpacked as follows. Since (2) and (3), as already discussed, include too abstract nominalizations, it is extremely

difficult to unpack it without specialists' support.

(3) unpacked example

Since screening tools such as cervical cytology to reduce mortality are succeed, (doctors?) are significantly interested in new methods that detect (cancer) early.

The following example does not show metaphorical logical relation between clauses but it is worth analyzing as another example of metaphorical shift.

(4)

The COVID-19 pandemic has contributed to a further reduction in access to cardiac rehabilitation.

(from Example 3)

The word *pandemic* seemes 'dead' metaphor and *The COVID-19 pandemic* is treated as a congruent form. However, in this text, circumstance element, which is more congruently realized by a prepositional phrase is more metaphorically realized by a verbal group, *has contributed to*. In addition, *a further reduction in access to cardiac rehabilitation* is a nominalization. This clause can be unpacked as follows:

(4) unpacked example

Due to the COVID-19 pandemic, less and less patients have undergone cardiac rehabilitation.

Unpacked texts do not always carry the same meanings as metaphorical ones. As observed in this and previous sections, sometimes unpacking is not successful and some texts are too abstract to be unpacked without specialists' support. Still, unpacking seems a proper way to remove difficulty from the language of science. In addition, as Washitake (2021) has illustrated, there are more difficulties in unpacking texts in scientific papers. Thus, at least in terms of learning how to unpack nominalizations, it seems reasonable to conclude that abstracts of *Nature Reviews* are suitable reading materials for students.

2.4 Clause Complexes

Clause complexes are related to grammatical intricacy, another complexity in a text. According to Halliday (2014: 438–451), clauses are linked by two principles: taxis and logico-semantic type. When the status of two clauses are equal, the relation is called parataxis (notation: 1 2 3); and when one clause

depends on the other, the relation is called hypotaxis (notation: α β γ). Logico-semantic type is grouped into two: expansion with three subcategories and projection with two subcategories. By expansion one clause expands the other by elaborating it (notation: =), extending it (notation: +) or enhancing it (notation: ×); on the other hand, by projection, one clause projects the other as a locution (notation: “) or an idea (notation: ‘).

As far as I observed, abstracts of *Nature Reviews* do not tend to exploit clause complex: Example 1 uses two clause complexes and Example 2 and 3 use only one clause complex respectively. In addition, the clause complexes are simple: two clauses are linked in each clause complex. Clause complexes in examples are analyzed as follows:

Figure 7: Analyses of clause complexes in Examples

Recent technological advances have now largely overcome these issues,	and multiple mRNA vaccine platforms against infectious diseases and several types of cancer have demonstrated encouraging results in both animal models and humans.
1	+2

(from Example 1)

This Review provides a detailed overview of mRNA vaccines	and considers future directions and challenges in advancing this promising vaccine platform to widespread therapeutic use.
1	+2

(from Example 1)

To address this issue,	synthetic biomarkers are being developed.
×β	α

(from Example 2)

Future approaches to the delivery of cardiac rehabilitation need to align with the growing multimorbidity of an ageing population	and cater to the needs of the increasing numbers of patients with cardiac disease who present with two or more chronic diseases.
1	+2

(from Example 3)

As these analyses illustrate, clause complexes in example texts are not complex. Thus, it does not seem that clause complexes cause difficulty in reading abstracts of *Nature Reviews*. This characteristic applies to reading scientific papers (Washitake, 2021).

2.5 Approachability

Since reading scientific papers is related not only to construing specialized knowledge but also interpreting the grammar of scientific discourse, teaching how to read scientific papers requires commitment of English teachers. However, English teachers are specialists of language teaching but not experts of science: reading scientific papers is a huge burden to them.

As illustrated in this paper, abstracts of *Nature Reviews* share significant lexicogrammatical characteristics with scientific papers. However, it seems that they are different in the following ways:

(a) As far as I observed, meanings of words in example texts are identified by consulting with general English-Japanese dictionaries: presumably abstracts of *Nature Reviews* do not utilize 'peculiar usage', using general words as technical terms (Washitake, 2021). Understanding 'peculiar usage' requires specialized knowledge in the field in question.

(b) Since articles in *Nature Reviews* are written as accessible, introductory overviews (nature.com), at least their abstracts are not too difficult for those with little knowledge in the scientific field in question.

Thus, it seems possible for English teachers to understand abstracts of *Nature Reviews* with some or no support from specialists.

3. Conclusion

This paper has explored three abstracts of *Nature Reviews* from the perspective of Systemic Functional Linguistics. It focused on 'thing' as participants, nominalization, metaphorical realization of logical relations, clause complexes and approachability. As a result of exploration, it found that 'thing' as participants, nominalization and metaphorical realization of logical relations can cause difficulty in reading. These lexicogrammatical problems are observed in scientific papers (Washitake, 2021). In addition, to 'ordinary' English teachers, abstracts of *Nature Reviews* are easier to approach since the articles are generally written as accessible, introductory overviews. This means that with some or no specialists' support, English teachers can read abstracts of *Nature Reviews* and instruct students how to read scientific papers in terms of their lexicogrammatical characteristics.

In conclusion, abstracts of *Nature Reviews* are helpful materials toward students' reading scientific

papers in two ways: the lexicogrammatical tendencies are similar; and abstracts of *Nature Reviews* are more approachable to those with little specialized knowledge.

Abstracts of *Nature Reviews* treat a wide range of contents regarding latest science and medicine. However, this is one factor to be considered but not the crucial point in deciding reading materials. When choosing reading materials for a specific purpose, focusing on lexicogrammatical characteristics is important as well as on its content.

References

Banks, D. (2008) *The Development of Scientific Writing: linguistic features and historical context*. London and Oakville: Equinox.

Böttcher, E. (2017) *Longman Academic Reading Series 1: reading skills for college*. Hoboken: Pearson Education.

Butt, D. et al. (2012) *Using Functional Grammar: an explorer's guide* (3rd edition). South Yarra: Palgrave Macmillan.

Halliday, M. A. K. (2002) 'Spoken and written modes of meaning', in Webster, J. (ed.) *On Grammar* (Collected Works of M. A. K. Halliday, Vol. 1). London and New York: Continuum. pp. 323–351.

Halliday, M. A. K. (2004a) *The Language of Science* (Collected Works of M. A. K. Halliday, Vol. 5). London and New York: Continuum.

Halliday, M. A. K. (2004b) 'Language and knowledge: the 'unpacking' of text', in Webster, J. (ed.) *The Language of Science* (Collected Works of M. A. K. Halliday, Vol. 5). London and New York: Continuum. pp. 24–48.

Halliday, M. A. K. (2004c) 'The grammatical construction of scientific knowledge: the framing of the English clause'. In Webster, J. (ed.) *The Language of Science* (Volume 5 in the Collected Works of M. A. K. Halliday). London and New York: Continuum. pp. 102–134.

Halliday, M. A. K. (revised by Matthiessen, C. M. I. M.) (2014) *Halliday's Introduction to Functional Grammar* (4th edition). London and New York: Routledge.

Halliday, M. A. K. and Martin, J. R. (1993) *Writing Science: literacy and discursive power*. London: The Falmer Press.

Halliday, M. A. K. and Matthiessen, C. M. I. M. (1999) *Construing Experience through Meaning: a language-based approach to cognition*. London and New York: Continuum.

Kwong, G. A. et al. (2021) 'Synthetic biomarkers: a twenty-first century path to early cancer detection'. *Nature Reviews Cancer* 21. pp. 655–668.

Martin, J. R. and Rose, D. (2008) *Genre Relations: mapping culture*. London and Oakville: Equinox.

Martin, J. R. and Veel, R. (eds) (1998) *Reading Science: critical and functional perspectives on discourse of science*. London and New York: Routledge.

nature.com "The Anatomy of a Nature Journal". https://www.nature.com/documents/The_anatomy_of_a_Nature_journal_infographic_cancer.pdf (accessed November 6, 2021)

Pardi, N. et al. (2018) 'mRNA vaccines—a new era in vaccinology'. *Nature Reviews Drug Discovery* 17. pp. 261–279.

Simmon-Vandenbergen, A.-M., et al. (eds) (2003) *Grammatical Metaphor: views from systemic functional linguistics*.

Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.

Taylor, R. S. et al. (2021) ‘The role of cardiac rehabilitation in improving cardiovascular outcomes’. *Nature Reviews Cardiology* 16. pp. 1–15.

Thompson, G. (2014) *Introducing Functional Grammar* (3rd edition). London and New York: Routledge.

Washitake, M. (2021) ‘Toward academic reading (I): from general reading to research papers in cell biology’. *Foreign Languages and Literature (Goken Kiyo)* 46(1). pp. 3–24.

Washitake, M. (forthcoming) ‘Reading popular science magazines: a systemic functional perspective on choosing teaching materials toward academic reading’. *Foreign Languages and Literature (Goken Kiyo)* 47(1).

ベルタ・フォン・ズットナーの文学について

――『機械時代』の文学批評を手掛かりに――

糸井川　修

キーワード：自然主義、リアリズム、平和運動、共苦、戦争体験

号令のもとで互いに殺しあわなくとも、闘うべき相手は十分ある。病気、洪水、雪崩、貧困、狂気、猛獣――それに野蛮な人間――これらはすべて、自分たちを守るために一層の闘争心をかきたてる敵である。（ズットナー『ある魂の財産目録』より）[1)]

1）はじめに――平和運動家・作家ズットナー

ヨーロッパ平和運動の母とも呼ばれるベルタ・フォン・ズットナー（1843–1918）は、第一次世界大戦前の国際平和運動における最も著名な指導者のひとりである。彼女が平和運動家としての道を歩むきっかけとなったのは、1889年に発表した反戦小説『武器を捨てよ！』*Die Waffen nieder!*[2)]の思いがけない成功だった。この作品は、戦争の廃絶という大きなテーマに彼女が初めて本格的に取り組んだものであり、彼女の最も有名な作品であるとともに、その後の彼女の生涯を決定づけた最も重要な作品である。発表後、『武器を捨てよ！』はズットナーの代名詞となり、彼女はこの作品と題名の三語の呼びかけをもって平和運動の最前線で活躍する平和の闘士となっていった。

ズットナーは平和運動家として様々な国際会議に出席し、広くロビー活動を行い、平和運動の現状や国際的な政治状況について定期的に機関誌に報告を書き続けた。その一方で、作家としても小説を中心に作品を発表し続け、ノーベル平和賞を受賞した翌々年の1907年には12巻の全集を出版している[3)]。それゆえズットナーのことを紹介する場合、「平和運動家（Pazifistin,

Friedenskämpferin)」と「作家（Schriftstellerin)」という二つの肩書きが併記されることが多い。

彼女が執筆活動を始めたのは、1876年の結婚直後から９年に及んだコーカサス滞在中のときである。最初の小説『ハンナ』*Hanna* は1882年に出版されている。彼女はこの頃から同時代の作家たちと交流を持ち始めたようで、『回想録』*Memoiren*（1909）には、「当時はまさに『文学の革命』の時代だった、そして私たちは強い関心を持ってこの革命のあとを追いかけた」[4)]とある。ここに言う「文学の革命」とは自然主義文学のことであり[5)]、実際に彼女はスカンジナビアの自然主義の先駆者ゲオーア・ブランデスと文通したり、ミヒャエル・ゲオルク・コンラートが編集するミュンヘンの自然主義の機関誌『ディ・ゲゼルシャフト』に『エス・レーヴォス』*Es Löwos*（1886）など数編を寄稿したりしている[6)]。

1885年、ズットナー夫妻は結婚に反対だった夫の両親の許しを得てオーストリアに帰国するが、この頃彼女は自然主義作家たちとの交流を保ちながら『ダニエラ・ドルメス』*Daniela Dormes*（1885）や『ハイライフ』*High-life*（1886）など幾つもの作品を続けて発表した。そして1886年から87年にかけての冬、パリを訪れ、親交のあったアルフレッド・ノーベルに会った彼女は、知人たちとの語らいの中で戦争の廃絶を目指す平和運動の存在を知る。「この平和連盟に貢献したい――その理念を広げる本を書くよりほかに、私にそれをよりうまくできる方法があるだろうか」(Leb 215)。そう考えたズットナーは、『武器を捨てよ！』の執筆にとりかかり、およそ三年の歳月をかけて作品を完成させた。

ズットナーの初期の作品群において、タイトルだけを見れば、『武器を捨てよ！』のように反戦姿勢を示すものは他にない。しかし、ダーウィンの進化論やバックルの『イギリス文明史』(1857、1861）に親しんでいた彼女は、すでに『ある魂の財産目録』*Inventarium einer Seele*（1883）の中で「戦争の精神」「軍縮」「世界平和の理念」などを扱った章を設け、「『平和』という概念も私の喜びのひとつであり、私の信条のひとつである」(Inv 100）と前置きしたうえで、戦争を文明の進歩に背くものとして強く批判している。そこで引用されるバックルの言葉は、いわば彼女の信念を代弁するものだ。

> 「人類の知る最大の悪」――その偉大な思想家は彼の著作の第４章にそう記しているが――「宗教的な迫害を除いて最も大きな苦悩の原因となってきたのは、間違いなく、戦争の遂行という慣習である。この野蛮な手段が社会の進歩とともに永続的に用いられなくなっていくことは、ヨーロッパの歴史を表面的に読んだだけでも明白であるに違いない[…]」(Inv 102)

この「人類の知る最大の悪」、戦争という巨大な相手に、ズットナーは作家として、どのよ

うに立ち向かおうとしたのか。彼女の文学の特質はどのような点にあるのか。それは非常に大きなテーマであり、簡単にすべてを論じることはできないが、本稿では彼女の著作『機械時代』の文学批評を手掛かりにして、『武器を捨てよ！』や『回想録』、レオポルト・カッチャーによるズットナー全集の序文[7]などを参照しながら探ってみたい。

２）『機械時代』の文学批評

ズットナーは、『武器を捨てよ！』とほぼ同じ時期に『機械時代――私たちの時代に関する未来の講義』*Das Maschinenalter. Zukunftsvorlesungen über unsere Zeit*（1889）を発表した[8]。この作品は、副題が示すように未来の視点から当時の19世紀後半の社会を振り返り、様々な分野にわたって論評を加えたものである。そのうちの第８章が「文学、芸術と科学」に関する章で、文学については10ページほどが充てられている。ズットナーはそこで当時の（すなわち彼女と同時代の）文学傾向を客観的に論じているが、その内容はまさに彼女自身の文学の特徴として捉えることも可能だと思われる。そこで該当部分を紹介しつつ、ズットナーの文学について論じることにする。

2-1）リアリズムと自然科学

『機械時代』の第８章では、19世紀後半の文学について述べる前に、それまで「世界文学（Weltliteratur）」として偶像崇拝的に高く評価されていた文学への言及がなされている（MZA 250ff.）。ズットナーによれば、そのような評価は、これまで「同時代人ではないこと」が「作家が偉大であること」の主要な条件とされてきたことによる。古い作家ほど時代と共に評価が積み重ねられ、ついには「昔から有名な作家の偉大さは、ただ天賦の力のみによる」と信じられるようになる。そうした「神聖なもの」に祭り上げられた「天才」には、ソフォクレス、ヴェルギリウス、ダンテ、シェイクスピア、ミルトン、セルバンテス、ゲーテらが連なる。しかし「世界は前へ進んでおり、その中のすべてのものが、芸術家も詩人もであるが、進歩している」。それゆえ「時代精神の光を映し出す」芸術がいくら「素晴らしく磨かれた鏡」であったとしても、（進歩した）現実の投じる光よりも優れた光を映し出すことはなく、文学や芸術家に対するかつてのような偶像崇拝はなくなってしまった、としている（MZA 250ff.）。

また、この時代（19世紀後半）に文学や作家に対する関心が薄れつつあったことについて以下のような言及もある。「教養の広がりと本や雑誌の予測不能な多様化」とともに、文学の宝庫が質的、量的に成長した結果、以前のように目に見える傑出した作家は存在できなくなった。「印刷術の発明」と「新聞」の登場による読者の激増によって、「『古典的』作品の時代は

過ぎ去った」というのである。さらに軍事国家であったドイツでは、「最も強い関心と最高の国家的自負は戦争と政治に関する事柄に向けられ」、文学や作家に関心が向けられることはなかった。特に、「男性は読書をせず」、休養の時はその日に起こりそうな出来事をネタにビアハウスやカフェーでの議論を好んだ。従って「読み物は新聞に載っているもので足りた」。女性のための文学も登場し、雑誌は普遍的な読者の需要に対応しようとしたが、作家に求められたのは「害にならない、傾向ものではない、思想を含まない、張り詰めた展開と満足させる結末の物語」でしかなかった。その結果、現代のドイツ作家全体の評判が落ちてしまった（MZA 252ff.）。

こうした中でひとつの「新しい流派」（MZA 257）が登場したことを、次のように紹介している。

> 「真実、真実、真実！」との叫び、それは科学の領域からほとばしり出て、ひとつの領域から別の領域へと反響し、他のどこよりもいっそう大きく文筆家たちに響き渡った。「仮面をはがせ、慣習と決まり文句を捨てろ――現実を我々は欲する、自然を我々は欲する、鮮やかな、生きた、真実のそれを！」そして、あらゆる現象を「―主義（イズム）」の型にはめ込む昔ながらの衝動に従って、この現実のもの、自然のもの、真実のものを追及する傾向は、即座にリアリズム（Realisumus）、自然主義（Naturalismus）、真実主義（Verismus）と名付けられた。（MZA 257f.）

文学史からの引用を思わせるような文章であるが、明記されているように、この流派は「自然主義」である。「リアリズム」とも書かれているが、それはいわゆる初期の詩的写実主義ではなく、時代の問題に目を向け、社会批判の観点から現実を描き出そうとした自然主義のリアリズムを指すと理解してよいだろう。自然主義文学においては、「とりわけ小市民階級とプロレタリアートの道徳的、経済的な貧しさ、大都市の中で排斥された者たちの状況、貧困、病気、悪習、犯罪などの描写」に関心が向けられ、それとともに「市民階級と彼らの楽観主義、二重道徳、成立しつつある産業社会で未解決の文明的問題に対する無関心への積極的な批判」も加えられた[9)]。

こうした諸問題の中で、戦争は明らかに「人類の最大の悪」でありながら、当時の文学作品で批判の対象として取り上げられることは稀であった。戦争の醜悪な場面が描かれることはあっても、それは戦争を批判するためではなく、敵に対する憎しみを煽るためのものでしかなかった[10)]。そのような中で『武器を捨てよ！』は、戦争自体の残酷さと野蛮さに真っ向から批判を加えたのである。それは、M. G. コンラートの言葉を借りれば、「あらゆる論拠をやりこ

め、あらゆる反論を沈黙させ、今日の戦争の文化経済活動の愚かさと血生臭い滑稽さを容赦なく暴き出し、何らかの邪悪な利害関係を理由に戦争を根絶しがたいと主張するすべての人を炎の鞭で糾弾する、戦争に対する芸術的闘争文書」になろうとした作品であった[11)]。ズットナーは、戦争という慣習が残っているのは、人々の無知と無頓着さによるのであって、その悲惨な現実を知らされれば、人々は戦争を拒絶し、軍国主義に反対するだろうと考えていた[12)]。彼女は作品に込めた思いを次のように述べている。

> 私が望んだのは、自分が考えたことだけでなく、感じたこと――激しく感じたこと――を、本の中に書き込めるようにすることだった。戦争を想像したときに私が心に感じた焼けるような痛みを、私は表現したかった。――命、痛みにうずく命――現実、歴史的現実を私は描き出したかった。(Leb 215)

この言葉の通り、『武器を捨てよ！』が戦争の悲惨さを描いたリアリズムの作品であることに異論を唱える人はいないだろう。作品では、戦場の残酷な様子が主人公の夫フリードリヒの手紙によって次々と伝えられている。そのような手紙を書き続けることについて、「それは僕が真実を渇望し、真実を率直に表現したいから、いつだって嘘っぽい決まり文句を憎んでいるからだ」(DWN 145) と彼は記している。フリードリヒの語る戦場の様子や主人公マルタを気絶させる瀕死の負傷兵の様子は、当時、出征した男たちでなければ一般には知ることのない事実であった。その悲惨さは戦場だけでなく、引き揚げ兵が原因となったコレラ蔓延の悲劇にも及んでいる。ズットナーは作品を書くために、「1859年、1864年、1866年、1870–71年の出兵に関する報告、様々な司令官の回想録を読み」「外科医、軍医、それに『赤十字』の人々の手記を吟味し」「図書館や公文書をくまなく捜し」た、と記している[13)]。

また、この物語が「女性・妻・母親の視点から語られている」[14)]ことも大きな特長である。作品では、出征した夫を心配する妻の心情や愛する子供の戦死に打ちひしがれる母の姿など、女性の目から見た（それはすなわち人間性の目から見た）戦争という男の論理の矛盾が際立つように描かれている。さらに過去の戦争のノスタルジックな称賛とは対照的に、まだ人々の記憶に残る同世紀の敗戦続きの戦争を取り上げたことも重要である[15)]。ズットナーは、歴史資料を頻繁に引用しながら、戦争がどのようにして意図的に作り出されるのか、いわば戦争発生のメカニズムまで描き出そうとしている。戦争は、いつも人間が作り出すものなのだ。

ズットナーにとっては、こうした戦争の真実をいかに多くの人に伝えるかもまた重要な問題であった。彼女が『武器を捨てよ！』を新聞で発表しようと考えたのは[16)]、幅広い読者層に求めやすい形で読まれることを考えたからであろう（それは断られ、結局2巻の単行本として出

版された)。対象となる読者は男性、女性ともに考えられるが、とりわけ彼女は深い思慮もなく戦争に協力し、夫や子供を戦場に送り出してきた女性たちに戦争について考える機会を与えようとした。『武器を捨てよ！』をはじめ、彼女の小説の多くが恋愛物語の体をなしているのは、女性読者の関心を惹きやすくするためであろう。彼女は「文学（Belletristik)」について次のように述べている。

> 文学には、仕事のない人々の退屈な時間をなくすことよりもっと崇高な義務があります。本というものは、考えるきっかけを与えなければならないのです、それが専門書（Fachwerk）であっても、小説（Roman）であっても、最も厳密な意味における文学（Dichtung）であっても。[17)]

このような文学の役割についての考えは、さらに一歩踏み込んで、傾向文学の肯定にも繋がる。『武器を捨てよ！』が、戦争の廃絶と仲裁裁判所の設置を進める運動のために書かれた作品であることに間違いはない。ただ、傾向文学というレッテルには、一般に作品の質や芸術性の低さというイメージが纏わりつく。ズットナーは傾向小説作家という批判に悩まされたが、それに反論するように、ある登場人物に語らせている。

> 私は傾向小説を素晴らしい友としています、なぜなら私の見るところ、この言及した芸術ジャンルには、他の文学作品よりも優れた長所があるからです。それはつまり、批評の際、述べられたテーゼに対して読者一人ひとりに賛成なのか反対なのかを考えるきっかけを与え、それによって思考が活発になり、意見を闘わせる喜びが生まれ、理念が磨かれるという特性です、そして、確実にそこからまた幾つもの真実の火花が飛び散るのです。[18)]

ところで、『機械時代』の文学批評には、19世紀後半のリアリズムは「最新の科学研究の成果に基づく」ゆえに、真実の追求という意図は過去の文学と変わらなくても、「諸々の真実それ自体が新しいものとなる」とある。そして、「あの新しい時代が見たものとは、自然の必然性の揺るぎない支配、見かけ上極めて独立している出来事の因果関係、物質と結びついた人間の心の病理学的現象、遺伝の影響、あらゆる物事の不変の発展である」と述べられている(MZA 259)。

ズットナーはコーカサス時代に沢山の書物をヨーロッパから取り寄せ、夫と共に貪るように学んだことを『回想録』に記している。その中でも「私たちの精神に予想もしないことを解明させたのは、とりわけ自然科学だった」。彼女は、その自然科学への関心について上記の『機

械時代』の引用と似たことを記している。

> 私たちは最新の自然学者から知識を手に入れたが、彼らは同時に自然哲学者でもあり、彼らの研究からひとつの新しく輝かしい発見、すなわち、私たちの素晴らしい世界全体は発展の法則のもとにあるということが明らかになった。この世界は極めて単純な諸々の根源から発展して今日の複雑な状態に至っており、それにはまだ予測不能な未来の姿が保証されている。さらに現代知識がもたらすその他の認識、すなわち、ひとつの力から別の力への諸々の力の可変性、あらゆる因果関係の確かな連鎖、原子の不可分性、無機世界と有機世界の、そして精神的活動と身体的活動の間の継続性――簡単に言えば、世界の一貫性は、人間の社会の発展も同じ法則によって起きること、そしてそこにも予測不能な未来の姿が保証されていることを推測させる。(Leb 187)

この引用によれば、ズットナーの関心は主として、一切の事物における進歩・発展の法則と因果・相関関係という二点にある。そこから、戦争という野蛮な慣習は時代と共に減少し、やがてはなくなるということ、また「平和は文化の進歩によって必然的に導き出される状態である」(Inv 107) という結論が引き出される。しかし、それが達成されるには長い時間がかかり、手遅れになる前に平和への歩みを加速する必要がある。そのために彼女は平和運動に関わり続けたのである。ひとりの人間が世界に及ぼす力を信じるゆえに、彼女はどのような苦境にあろうと最期まで平和のために闘い続けたのだ。

『武器を捨てよ！』では、文明の進歩を確信するフリードリヒが、戦争を次のように捉えている。

> 「なぜなら」と言って、フリードリヒはポケットから鉛筆を取り出し、一枚の紙に螺旋を描きました。「なぜなら、文明はこのようにして進歩するからです。この線は、時々曲がって逆戻りしますが、確実に前に進んでいないでしょうか？　もちろん、今始まったばかりの一年が曲線を描くことだってあります。特に、現れている予兆通りに、再び戦争が始まった場合です。戦争により、物質と道徳の両面で、文化の著しい後退が繰り返されるのです」(DWN 187f.)

当時の人々の考えでは、戦争はいわば「地震」のように必然的に起こる「自然の法則」であり、なくすことなどできないものだった。「戦争は常にあったのであり、したがってこれからも常に戦争はあり続ける」(DWN 184) という固定観念こそ、ズットナーが打ち砕かねばなら

ない最も大きな壁だったと言える。それを覆すために、彼女は作品の中で繰り返しトーマス・バックルを引用し、文明の進歩とともに人間の「戦争の精神（Kriegsgeist）」は確実に減少していくこと、そして戦争のない時代が必ず到来することを訴えたのである。

2–2）共苦（Mitleid）[19)]

『機械時代』には、19世紀後半の「若者たち（Junge）」の作品に見られる「溢れんばかりの共苦（ein umfassendes Mitleid）」（MZA 260f.）についての言及がある。作家は「自分の周囲の苦しみや発せられない苦悩」を感じ取り、「自身の内面で鳴り響くその世界苦を、すすり泣く歌の中に発露する」。しかし、この世界苦はそれ以前の文学に支配的であった愛の苦悩などを誇張する「自己の苦悩の利己的な賛美」とは違うものだと言う。

> 当時、文学の中に表れていたその苦痛の叫びは、共感（Mitempfinden）という利他的な心の動きから生まれ、これほど美しく、これほど歓喜の充溢の可能性に富んだ世界の只中で、いまだに精神の隷属と不幸に苦しまねばならない幾百万の同胞に向けられた。（MZA 261）

この文章は、進歩しつつある社会の中で虐げられた境遇にある人々への共苦を想像させる。しかし、このあとズットナーが引用するのは、９月の暑い日に自然の中を散策する詩人が牛の鳴き声を聞いて襲われる戦慄である。それは「すでに幾度となく、激しく彼が感じていた」もので、「彼にはそれに責任があるように思われる」。引用されるのはデートレフ・フォン・リリエンクローン（1844–1909）の詩である。

> お前は何を望むのか、動物よ。それは確かに耐えられないことだ！
> お前は、哀れな人間の嘆きなのか
> 不正な判決を法廷で受け
> そして今、狂わんばかりに理解できないでいる
> それが起きたことと、太陽が
> 落下しなかったことを、その判決が下されるときに［…］（MZA 262）

このような苦痛の叫びは、「ようやく動物性から人間性が生まれ出た時に、そしてようやく――とてもゆっくりではあるが――人類が人間らしい存在へと引上げられたときに」聞き取ることができるようになったのであり、「すでに太古の時代にも、ときおりそのように鋭い感覚

をもつ存在――仏陀やキリスト――が現れて、共感（Mitgefühl）に打ち震えた」。しかし、「嘆きと非難を口にする者たちが呼びかけ続けたあの二つのもの、同情心（Erbarmen）と正義（Gerechtigkeit）に全人類が目覚めるまでに、どれほど長い時間を要しただろう」と著者は厳しく批判する（MZA 262）。

ここでは、悲惨な境遇の人々に対して無感覚である個人に批判が向けられているのではない。人間全体の存在に関わる問題として、未だに野蛮なままで動物性から抜け出していない人類への批判、倫理と人間性に欠ける社会や世界に対する苦悩が語られていると言えるだろう。ズットナーはダーウィンの進化論やバックルの社会進化論を自己流に解釈し、人類は道徳的領域においても善性に満ちた高貴な存在に変化していくと強く信じていた[20)]。彼女の考えでは、共苦もまた人間の向上と結びついた感情なのである。共苦は「人間の――しかも文明化した人間の――登場と共に広がり始めた」「感情の華（Gefühlsblüte）」であり「美徳」であって、「それが私たちの存在の高貴化（Veredelung）であることは確かである。私たちの心情が発達すればするほど、私たちの共苦はいっそう容易に目覚めるようになり、それが及ぶ範囲はいっそう広がる」。「大衆の貧困や汚れや無知への思い、不健康な労働区域や飢えた村々に巣くう多くの苦しみへの思いは、普段は無頓着な人々の懸念となり、人道的な努力へと転換される」のである[21)]。

このように考える彼女にとって、人々を苦しめる新しい時代の社会問題はもちろん見過ごせないが、太古の時代から続く最も野蛮で非道な慣習、すなわち戦争こそ真っ先に無くさねばならないものだった。『機械時代』で述べられている「世界苦」は、19世紀に入って格段に進歩をとげた文明社会において、いまだに戦争という悲惨を生み出し続けている人類にも向けられるだろう。そして、その現実に対する自身の関与と責任を感じるとき、それは後悔（Reue）の念を生む。『武器を捨てよ！』の中で、戦場の悲惨さを体験したフリードリヒは、その複雑な感情を「時代の良心に対する憤り（ein Vorwurf des Zeitgewissens）」と表現する。

> 痛ましい悲惨を目の当たりにして、「こうならなければいけなかったのだろうか？」という疑問がひとたび湧き上がるや、冷酷な心のままではいられなくなるのです。そして憐憫の情（Mitleid）とともに、悔いのようなものが胸を締めつけて……いえ、それは決して個人的な後悔ではありません。なんと言えばいいのでしょう？――時代の良心に対する憤りでしょうか。（DWN 94）

こうした体験を重ねた後、フリードリヒは軍隊を退き、平和のための活動を開始する。作品では、戦争廃絶のために努力する「気高い人間（Edelmensch）」という理想が語られるが、主

人公マルタにそのモデルとして映るフリードリヒは、とりわけ「共苦」の感情に満ちた人間として描かれている。彼が最初にマルタを訪問したのは、彼女の苦悩を和らげようと、亡夫アルノーの戦場での最期が榴弾の爆破による瞬時のもので、苦痛に満ちた死ではなかったことを知らせる為である。その話を「軍人に相応しくない」と聞き流す父とは対照的な、彼の「人間としての気高さが示した（戦争への）嫌悪」に、彼女の心は惹かれてゆく（DWN 58）。そして、夫の死を通じて彼女に生じた戦争への疑問と共苦の感情も、フリードリヒとの語らいを通じて大きくなるのである。

また、共苦をズットナーの文学に欠かせない特徴のひとつとするカッチャーは、「彼女は苦しんでいる生きものすべて――人間と動物――あらゆる種属の苦しみを、心を打つ倫理的な共苦で共にする」と述べている[22)]。フリードリヒの共苦が戦場で犠牲になる動物にも及んでいるのは、その例と言えるだろう。生きものに対する愛情のまなざしは作品の随所に見られるが、フリードリヒは炎に包まれて喘ぎ苦しむ馬の息の根を止めたり、泥沼で鞭打たれる馬車馬になった夢を見たりする。それは、彼の愛情の深さとともに戦争の矛盾と不合理をいっそう際立たせている。

> 人間は、なぜ自分たちの命が危険にさらされているのかを知っている、どこへ行くのか、何のためなのかを知っている――しかし、不幸な僕たちは何も知らない、僕たちの周りを囲むものは、すべて夜と恐怖だ。人間は味方と共に敵に立ち向かう、だが僕たちの周りはすべて敵だ……僕たちは主人に忠実に愛を捧げるつもりだった、それなのに最後の力をふりしぼって仕える僕たちを、主人は打ち据える……そして見捨てる……（DWN 225）

こうした共苦についての描写や記述は、『武器を捨てよ！』やズットナーの平和運動が「感傷的（sentimental）」と批判された理由のひとつでもあろう。そのような批判は、軍国主義者だけでなく、ズットナーと同じ平和運動の側からもあがった。例えば、カール・フォン・オシエツキーは、「ひどく繊細でひどく世間知らずな女性の、あのお涙頂戴の小説がこの運動の出発点であったことが、恐らくこの運動の運命だった。ズットナーの並外れた、純粋な願望はあらゆる名誉に値するが、彼女はその理念に対して、情け深さ以上により力強い表現形式を見出せなかったのだ。彼女は聖水で大砲に立ち向かった［…］」[23)]と語っている。その一方で、この小説が想像を超える影響力を当時の人々にもたらしえたのは、この作品に流れる、まさにズットナーの「共苦の力（Mitleidenskraft）」[24)]が読者に伝播したからではないだろうか。彼女の同志であったルートヴィヒ・クヴィデは後に当時を振り返り、「どんな会議も、集会も、演説も、チラシも、あの本ほど大多数の人たちを目覚めさせたことはなかった」[25)]と証言している。戦

争が生み出す苦悩への共苦の広がりは、戦争の現実への関心を高め、平和運動を広げる大きな力となったのである。

2–3）未来の予見……作家の使命

ズットナーは自然主義の作家に相応しく、教養批判、女性解放、国家主義や反ユダヤ主義など様々な社会問題に関心を持ち、作品で扱っている[26)]。『作家小説』*Schriftstellerroman*（1888）の登場人物には、「作家は役に立ち、心を高め、喜びを与えねばなりません――作家は真実、正義、美に奉仕したと言えなければいけません、喜びを阻む偏見を取り除かなければいけません、迷信と蒙昧を打ち壊す手助けをしなければいけません」[27)]と語らせている。彼女には文学作品を通じて社会の改善と人々の幸福に貢献したいという強い願望があり、人類のより良い未来への貢献を、いわば作家の使命と理解していたように思われる。『機械時代』には、次のような一節がある。

> 詩人は未来の予見者である。彼の心の目は、来たるべきものに向けられている。現代に欠けているもの、現代の苦悩、現代の危機と欠陥であるものを、彼らは生き生きと感知する。ゆえに現代を誇りとする者、現代に満足している者は、彼らに共感しない。（MZA 260）

ここでの「詩人（Dichter）」は、広い意味での「作家」として捉えたい。ズットナーによれば、この時代にはかつての天才に分類されるような詩人ではなく、「予言の才能と人類全体の痛みに共感する心を持ち」、「開かれた精神と開かれた心を持つ」者の中から「溢れ出る自らの思想と感情を文学作品に書き下ろしたいという衝動」に駆られる詩人が現れる。「彼らの研ぎ澄まされた耳は同時代人の嘆きの声を聞き分け、彼らの昂る心は時代への憧れのなかで鼓動する」(MZA 260)。

現代社会の欠陥、時代遅れの思想への批判は、より良い未来を築くためのものである。そして現実を批判する者は、当然、それに替わるビジョンや展望を示す必要があるだろう。ここでいう「予言の才能」というのは、神秘的な力ではなく、科学的知見をもって来たるべき未来の世界像を示す力とも捉えられる。その力によって示される、より良い未来の姿は、強いメッセージとして人々に希望と現実変革への勇気を与える。

ズットナーの小説で作家の登場人物が目立つのは、作家のこのような使命と無関係ではないだろう。『武器を捨てよ！』の主人公マルタは作家ではないが、自伝を執筆することによって、自分が体験した戦争の真実を世に伝えようとする。また、その続編の『マルタの子供たち』

Marthas Kinder（1903）では、マルタの娘ジルビアを心から愛し、夫の不義に苦しむ彼女を古いしきたりから解き放って救おうとするのが作家フーゴー・ブレッサーである。また、ズットナーの最後の小説『人類の崇高な思想』*Der Menschheit Hochgedanken*（1911）において、主人公フランカ・ガレットを新しい時代の女性指導者に導くクロードヴィヒ・ヘルマーも作家（詩人）である。彼は世界を旅して周った後に創作に取り組み、高い文学的評価を得るなかで壮大な叙事詩を書き上げる。それは人類が獲得した航空技術を軍事利用から守り、人間の精神の飛翔を促す作品である。

> だが最も大きな成功を収めたのは、彼の叙事詩『翼（Schwingen）』だった。そこには、イカロスからツェッペリンとブレリオに至るまでの空の世界を支配する歩みのすべてが歌われていた。だが、さらに予言的な調子で、未来を見据えて――そして作品のこの部分はさらに壮大なものであったが――人間の創造的精神による成果の中で最も強力な、あの成果によって起こるであろうと思われる変化が描かれていた。特に詩人が歌ったのは、いわば物質の翼と相まって、人間の精神と人間の道徳的意志をより明るい領域へと運ぶ翼であった。[28)]

自然主義の文学作品は社会問題を孕む現実の描写に力点が置かれることから、ペシミスティックで思想的な深みに欠けやすいことが指摘される。しかしズットナーの作品には、上記の引用に見られるような未来への明るい希望を示すものが多い。これは『武器を捨てよ！』についても言えることである。すでに述べたように、この作品は彼女が仲裁裁判所の創設を目指す平和運動の存在を知り、それを支援しようとして書き始めたものだが、作品のエピローグに掲載される運動の中心者ハドスン・プラットから主人公に送られた手紙は、とりわけ新しい時代の到来を予感させる。

> あなたが人生を捧げてこられた重大な問題の現状についてお尋ねを頂き、光栄に存じます。私のお返事をここにお届けいたします。世界史において、おそらく今日ほど平和と友好を築く好機はありません。長く続いた殺戮と破壊の夜が、今ようやく明けようとしているかに思われます。そして人間性という峰の頂に立つ私たちは、天上から地上に射し込む曙光の最初の一筋を見られるだろうと考えています。（DWN 392）

このような書き出しから始まる手紙には、1889年に開催された二つの会議、すなわち各国の平和協会の代表が集った第一回「世界平和会議」と諸国の平和を願う国会議員が集った「列

国議会同盟」の第一回会議の開催が、「将来、戦争が人類史における最も愚かで犯罪的な汚点であると見なされる時代が到来する兆し」（DWN 393）として挙げられている。作品ではまだ詳細が語られていない、この二つの会議を中心とする運動は、第一次世界大戦が勃発するまでのヨーロッパの平和運動の主流となっていく。そしてズットナーは自ら、その運動の中心者の一人として、戦争のない世界という予見した未来の実現のために闘っていくのである。

3）ズットナーの戦争体験

『武器を捨てよ！』の出版当時、主人公マルタの体験は著者であるズットナーの体験として読者に受けとめられた。作品が同時代を生きる女性の自伝風の語りで書かれていることが、何よりもそう感じさせた理由だろう。しかし、語りの形式だけでなく、扱われている生々しい戦争体験や戦争被害者への共苦、またそれらを通じて主人公が獲得する強い反戦の意志などから、今日でも読者は著者の戦争体験に関心を抱くにちがいない。『機械時代』の文学批評とは直接関係ないが、リアリズムとの関連からここでズットナーの戦争体験についても確認しておきたい。

> 私個人には戦争で何か苦しんだような経験はまったくない。私にとってかけがえのない誰かがその危険に晒されたことも決してない。また一度として戦争によって何か財産を失ったこともなければ、そうした苦しみのどれかを味わったこともない……それでももし、戦争に対する私の嫌悪感の起源を一つに帰そうとするのであれば、それは私の身に直接起こったことではなく、ただ私が読んだものだけである。[29)]

この手記にも見られるように、ズットナーは折に触れて切実な戦争体験がないことを表明している。しかし、戦争を身近に感じる機会が彼女になかったわけではない。ズットナー夫妻がコーカサス地方のクタイシに到着して一年も経たない1877年4月、ロシアがトルコに宣戦布告をして露土戦争が始まった。両国に挟まれる位置にあるコーカサスは戦場のひとつとなり、トルコ軍のクタイシへの侵攻も考えられた。この時のことについて、ズットナーは『回想録』の中で、「私たちが不安を感じていた記憶はない。戦争一般に対する抗議の感情も感じなかったのは、1866年（訳注：普墺戦争）や1870年（訳注：普仏戦争）の時とまったく同じだった」と前置きしながらも、「突然、近辺でペストが発生したという噂が流れた。それは私たちを恐怖で満たした」といった出来事や、戦争の影響によって収入が極端に減り、「私たちは当時、『飢え』という幽霊と顔を合わせる日さえ、幾日かあった」（Leb 178）という辛い経験を綴っ

ている。「クタイシでは多くの家庭が喪に服していた。帰還中だった百人は、百人で帰還しなかった」（Leb 178）との記述からは、後に作品で描かれるような悲嘆にくれる遺族の姿を彼女が目の当たりにしたことも考えられる。また、ズットナーが執筆活動を開始したのは、この時期に夫のアルトゥーアが露土戦争の報告を新聞社に送り始めたことがきっかけであり、彼女もこの戦争に無関心でいられなかったことは容易に想像できる。近年の研究でも、例えばコーエンは、ズットナー夫妻が露土戦争の影響を受けずに暮らすことは不可能だったとして、ズットナーが帰りの遅い夫を何時間も待つ夜、彼が殺されて川に投げ捨てられたのではないかとの恐怖に襲われ、パニックに陥ったことなどを紹介している[30)]。

この露土戦争では、ズットナー夫妻はバルカンにいる「スラブの兄弟を解放する」「ロシア側に共感を抱いていた」。二人は当初、負傷者を介護するロシア赤十字の活動に参加しようとしたが、同じ場所で働くことが無理と分かり、やむなく断念した。そして銃後の人々が戦場の兵士に物資を送る支援活動などに励むなか、彼女もクタイシの淑女たちが企画する負傷者のための催しに熱心に参加した。このような慈善事業の様子は『武器を捨てよ！』の中にも描かれているが、『回想録』では「今日、私にはこの最善のことよりもっと良いことがあるように思われる。それは彼らを送り出さないことだ！」（Leb 176）と振り返っている。

一年あまりで終結した露土戦争の期間の苦しい生活について、『回想録』には次のような記述がある。

> 後に私たちは、このような経験によって自分たちを豊かにしてくれた運命を称賛した。それらは恐らく、私たちの性格を鍛えることと、やがて公共への奉仕という私たちの協同の礎となり、私たちの中に次々とその喜びを感じさせる心情を目覚めさせた、あの人類の苦悩と民衆の悲惨への関わりを教えることに繋がった。（Leb 178）

つまるところ、露土戦争はズットナーに戦争体験を与えたのである。それは、彼女が後に身を捧げる平和運動、すなわち「人類の苦悩と民衆の悲惨への関わり」に彼女を導く、人生の貴重な礎となった。彼女は戦争の悲惨さと平和の尊さを伝える反戦小説において、こうした体験と経験による認識が重要な鍵となることを踏まえて、『武器を捨てよ！』の執筆に取り組んだものと思われる。「私はいかにして『武器を捨てよ！』を書くに至ったか」という文章の中で、彼女は次のように書いている。

> 私はもともと短い小説を書くつもりだった。ある若い女性についてのもので、彼女は心から愛する夫を戦場で失い、それによって戦争を非とする考えに至る、ちょうど私自身が次

第にそうなったように。私の場合、この確信はもちろん理論だけに拠っていたが、私の主人公は自らの体験と経験を通じてこの見解に考えを改めることになる。[31)]

4）終わりに

創作し、思索し、筆を執る同時代人の中に、真っ先に最も激しく時代の苦悩と切望にとらわれ、共に悲しみ、共に嘆いて、その苦悩を和らげ、切望を叶えることに貢献する――貢献せずにはいられない――人たちもいるということ、そして彼らが、精神の闘いによってもたらされる、より良き未来の到来を真っ先に見る人でもあり、自ら――最も情熱的に――闘いながら、そのより良い未来を導く援助を真っ先に行う、行わずにはいられない人たちでもあるということ――それを人々はほとんど知らなかった。（MZA 263）

これまで見てきたように、ズットナーが『機械時代』の文学批評で取り上げた同時代の文学は自然主義の文学である。本稿では、彼女が言及したリアリズム、自然科学の影響、共苦（共感）、未来の予見といった特徴を彼女自身の作品に結びつけて考察したが、これらの特徴はいずれも文学史や文学事典の自然主義のキーワードとして列挙されるものである。自然主義が「攻撃姿勢のリアリズム」[32)]とも言われるように、ズットナーもまた戦争の廃絶という大きな目的を達成するために、自らの文学作品によって戦争の真実を社会に訴えた。

『武器を捨てよ！』や彼女の反戦の思想・行動に対しては、当時「素朴（naiv）」「感傷的」という批判が多く浴びせられた。しかし、それは表面的な捉え方であって、実際に作品を読めば、彼女がいかに冷静に政治・社会状況を分析し、論理的に戦争の矛盾と不合理を示そうとしたかに気づかされる。『機械時代』の初版は、女性作家の能力に対する偏見によって読者が減ることのないように、「ある人（Jemand）」という匿名で出版された。その結果、この優れた評論は匿名の著者が誰なのか人々の話題になるほど、社会の注目を浴びることになった。この事実によっても、彼女の知性を無視し、感情面ばかりを強調する批判が的外れであったことは明らかである。むしろ、カッチャーが「彼女の独特の存在の、そして彼女の大きな文学的成功の秘密は、まさにこの際立った心情と理性の、プシュケーとロジックの混在にある」[33)]と述べたように、ズットナーは感情と理性という二つの力のどちらにも偏ることなく、真正面から人間を捉えた作家と言えるだろう。この地上から戦争をなくすために、人間一人ひとりの、そして全人類の持てるあらゆる力の結集を目指し、連帯に向けて粘り強い行動を続けた彼女に、私たちは未来の平和を創造する道を学ばねばならない。

注

1）Suttner, Bertha von: *Inventarium einer Seele*. In: Suttner, Bertha von: *Gesammelte Schriften*. 12 Bde. Dresden o. J. [1907] Bd. VI, S. 120.　以下、本作からの引用については、本文中に Inv の略記号とともに頁数を（　　）内に記す。なお、ズットナーの諸々の作品からの引用については、ブリギッテ・ハーマン『平和のために捧げた生涯――ベルタ・フォン・ズットナー伝』糸井川修・中村実生・南守夫訳、明石書店、2016年、原著 Hamann, Brigitte: Bertha von Suttner. Ein Leben für den Frieden. Piper Verlag. München 2009, 4. Auflage にその日本語訳がある場合、おおむねその訳に従った。

2）Suttner, Bertha von: *Die Waffen nieder! Eine Lebensgeschichte*. 2 Bde. E. Pierson. Dresden, Leipzig 1889. なお、本稿では Suttner, Bertha von: *Die Waffen nieder! Eine Lebensgeschichte*. Hrsg. und mit einem Nachwort von Sigrid und Helmut Bock. Berlin 1990を使用し、引用や関連箇所の表示については DWN の記号とともに頁数を（　　）内に記した。日本語訳はおおむね、筆者も翻訳作業に加わった次のものに拠る。ベルタ・フォン・ズットナー『武器を捨てよ！』（上）（下）、ズットナー研究会訳、新日本出版社、2011年。

3）Suttner, Bertha von: *Gesammelte Schriften*. 12 Bde. Dresden o. J. [1907].

4）Suttner, Bertha von: *Lebenserinnerungen*. Hrsg. und bearbeitet von Fritz Böttger. 6. Auflage. Berlin 1979. S. 199. 本書は、Suttner, Bertha von: *Memoiren*. Stuttgart und Leipzig 1909の新版である。以下、前者からの引用については、本文中に Leb の略記号とともに頁数を（　　）の中に記す。

5）Vgl. *Metzler Literatur Lexikon. Begriffe und Definition*. Hrsg. von Günther und Irmgard Schweikle. Zweite, überarbeitete Auflage. Stuttgart 1990. S. 320ff.

6）Vgl. Biedermann, Edelgard: *Nicht nur Die Waffen nieder!: Bertha von Suttner*. In: Tebben, Karin (Hrsg.): *Deutschsprachige Schriftstellerinnen des Fin de siècle*. Darmstadt 1999. S. 320.

7）Katscher, Leopold: *Zur Einführung!* In: Suttner, Bertha von: *Gesammelte Schriften*. 12 Bde. Bd. I, S. III–XIX. レオポルト・カッチャー（1853–1939）はオーストリアの評論家で、オーストリアとハンガリーの平和協会の役員を務めた。雑誌『武器を捨てよ！』の編集者（1895/96）でもあり、ズットナーの伝記 *Bertha von Suttner, die Schwärmerin für Güte*. E. Piersons Verlag, Dresden 1903の著者でもある。

8）*Das Maschinentalter. Zukunftsvorlesungen über unsere Zeit*. Pseudnym Jemand. Zürich [1889]. 本書の書名は後の版で *Das Maschinenzeitalter* と改められた。本稿では Suttner, Bertha von: *Das Maschinenzeitalter. Zukunftsvorlesungen über unsere Zeit*. Dritte Auflage. Dresden und Leipzig 1899を用い、引用や関連箇所の表示については MZA の記号とともに頁数を（　　）内に記した。

9）*Metzler Literatur Lexikon*. S. 320.

10）Vgl. Schenda, Rudolf: *Volk ohne Buch. Studien zur Sozialgeschichte der populären Lesestoffe 1770–1910*. Frankfurt 1970. S. 153. Zitiert nach: Häntzschel, Günter: *Die Waffen nieder! Bertha von Suttners Antikriegsroman. Zur Poetik und Ideologie der Frauenliteratur*. In: Borchmeyer, Dieter (Hrsg.): *Poetik und Geschichte. Viktor Zmegac zum 60. Geburtstag*. Tübingen 1998. S. 107f.

11）Conrad, Michael Georg: *Kritik. Romane und Novellen. Die Waffen nieder!* In: *Die Gesellschaft 6* (1890). S. 433. この批評は辛口で、『武器を捨てよ！』は残念ながら引用部分が示すような作品には至っていないとしている。

12）Vgl. Kovács, Henriett: *Die Friedensbewegung in Österreich-Ungarn an der Wende zum 20. Jahrhundert*. Hrsg. von Dieter A. Binder, Georg Kastner und Arnold Suppan. Herne 2009. S. 70.

13）Suttner, Bertha von: *Wie ich dazu kam, „Die Waffen nieder“ zu schreiben*. In: Suttner, Bertha von: *Aus der Werkstatt*

des Pazifismus. Leipzig und Wien 1912. S. 7f.

14）ピーター・ヴァン・デン・デュンゲン「日本語版の序文に寄せて」、ベルタ・フォン・ズットナー『武器を捨てよ！』（上）、ズットナー研究会訳、新日本出版社、2011年、 4 頁。

15）Vgl. Wintersteiner, Werner: *„Die Waffen nieder!"—Ein immer noch zeitgemässes Projekt*. In: Lughofer, Johann Georg (Hrsg.): *Im Prisma. Bertha von Suttner „Die Waffen nieder!"* Edition Art Science. Wien-St. Wolfgang. o. J. S. 196.

16）Ebd., S. 197.

17）Aus Suttner, Arthur Gundaccar von: *Was man erlebt. Ein österreichisches Schriftstellerpaar*. In : *Die Gesellschaft 1* (1887). S. 783.

18）Suttner, Bertha von: *Doktor Helmuts Donnerstage*. Zitiert nach Katscher, *Zur Einführung!* S. XIII.

19）ドイツ語の Mitleid という語には一般に「同情」「思いやり」「あわれみ」等の意味がある。筆者もズットナーの作品との関連では「同情」「同苦」等の訳語を用いてきたが、彼女が Mit-、mit-（共に）を伴う語を多用している意を汲んで、ここでは「共苦」と訳出した。

20）Vgl. Hamann, S. 8.

21）Suttner, Bertha von: *Doktor Hellmuts Doonerstage*. Dresden, Leipzig 1892. S. 65ff.

22）Katscher, *Zur Einführung!* S. XII.

23）Zitiert nach: Brinker-Gabler, Gisela (Hrsg.): Kämpferin für den Frieden: Bertha von Suttner. Lebenserinnerungen, Reden und Schriften. Frankfurt am Main 1982, S. 14.

24）Katscher, *Zur Einführung!* S. XII.

25）Zitiert nach: *Vermächtnis und Mahnung zum 50. Todestag Bertha von Suttners*. Herausgeber: Internationales Institut für Frieden, Wien o. J. S. 26.

26）Vgl. Biedermann, *Nicht nur Die Waffen nieder!: Bertha von Suttner*, S. 321.

27）Suttner, Bertha von: *Schriftstellerroman*. Zitiert nach Hamann, S. 100.

28）Suttner, Bertha von: *Der Menschheit Hochgedanken. Roman aus der nächsten Zukunft*. Verlag der Friedenswarte. Berlin-Wien-Leipzig o. J. [1911] S. 148.

29）UNO Genf, Bibliothek, Collection Suttner-Fried, Man. Erinnerungen 10. Zitiert nach Hamann, S. 118.

30）Vgl. Cohen, Laurie R.: *Arthur und Bertha von Suttners entscheidende Jahre im russischen Kaukasusu, 1876–1895*. In: Cohen, Laurie R. (Hrsg.): *Gerade weil Sie eine Frau sind… Bertha von Suttner, die unbekannte Friedensnobelpreisträgerin*. Wien 2005. S. 27.

31）Suttner, Bertha von : *Wie ich dazu kam,"Die Waffen nieder" zu schreiben*. S. 7f.

32）*Metzler Literatur Lexikon*. S. 320.

33）Katscher, *Zur Einführung!* S. XIV.

乙堂喚丑に係る『戒壇指南』の研究
――附録『戒壇指南』翻刻資料――

菅原研州

キーワード：近世仏教、曹洞宗、授戒会

一、はじめに

本論は、江戸時代中期の曹洞宗の学僧・乙堂喚丑（一六八四？～一七六〇）に係る資料『戒壇指南（以下、「本書」とも記載）』について研究するものである。管見の限り、本書は従来報告されておらず、近代の西有穆山（一八二一～一九一〇、大本山總持寺独住第三世）が自身の『傳戒會裏閑話』で、書名等を示さないまま引用したことが知られる程度かと思われる。

そこで、本論では写本『金剛集録』に収録された『戒壇指南』の翻刻資料を附録しつつ、その内容を検討し、また、近世以降の洞門授戒会の原型になったと思われる「大乘寺式授戒会作法」について、その復元を模索したい。

二、写本『金剛集録』について

本研究は、筆者所持の明治期写本『金剛集録』に収録された『戒壇指南』について検討するが、当該写本の書誌情報は以下の通りである。

一、冊数　一冊
一、料紙　楮紙
一、大きさ　縦23・5cm×横15・6cm
一、装丁　袋綴
一、題目　外題　金剛集録
　内容　傳戒會裏閑話〈明治廿七年記〉有安老人述
　　禅戒問答・禅戒問答續
　　国王授戒作法・梵網経古迹記
　　戒壇指南
　　祖師御行状略誌〈佛法房ハ於深草之房号也〉
　　正法眼藏玄談科釈・校閲正法眼藏序
　　天桂不知正（法の脱字）眼藏之由来事
　　坐禅撰・金龍軒問答
一、枚数　本文　九三丁
一、行字数　毎葉一〇行　毎行一六～二〇字
一、書写年　明治三〇年（一八九七）
一、筆記者　小子童龍

一、所蔵者　（旧蔵）不明（表紙に「古川藏書」とあるが詳細不明）
（現在）菅原研州

当写本は、明治三〇年四月と秋に童龍（永平寺六〇世・臥雲童龍［一七九六～一八七〇］とは別人）によって書写された。なお、『天桂不知正法眼蔵之由来事』の冒頭に、「此書ノ意依面山和尚闢邪訣　穆山和尚真筆」[1]とあって西有穆山自身の書き込みなどを受けており、おそらくは本書全体が西有穆山の直筆本からの、直接か間接の書写だったことが推測される。なお、『曹全』「禅戒」に収録される一丈玄長『禅戒問答』の底本である静岡県正泉寺所蔵写本と奥書が一致し、同類の写本であると思われる。

当写本の全体は、二本の写本を合わせたものである。上記の通り判断する理由として、当写本の筆記者による奥書は二箇所確認され、まずは『戒壇指南』に続いて「明治三十歳四月吉辰　小子童龍謹寫」[2]とあり、更に巻尾の『金龍軒問答』に続いて「明治三十歳〈丁酉〉秋日　龍杜夛謹寫」[3]とあるためである。よって、明治三〇年（一八九七）の四月と秋と二回に分けて書写されたことが理解出来る。更に、内容からも、前半は西有自身の戒学参究に関する内容であり、後者は『正法眼蔵』と坐禅、或いは洞門の宗旨に係る内容と、明確に二分化されている。

本論では、当写本の前半部分について特に検討する。まずは、各文献の解題を挙げておく。

①傳戒會裏閑話〈明治廿七年記〉有安老人述

有安老人とある通り、西有穆山によって明治二七年（一八九四）に提唱された、伝戒会（授戒会）に因んだ禅戒論である。本書の詳細も、機会を改めて検討する予定であるが、内容を略述すれば、前半は伝戒会の作法についての見解を述べられ、後半は特に洞門の菩薩戒における「戒体」について論じたものである。そして、特に伝戒会作法に因んで、当写本収録の『戒壇指南』から「懺悔法」「捨身法」などを参照されている。その際、西有は「乙堂和尚ノ口訣ニハ」「乙堂和尚云ク」等と表記[4]されており、『戒壇指南』を乙堂の著作だと判断していることになる。

②禅戒問答・禅戒問答續

『曹洞宗全書』「禅戒」に収録される一丈玄長『禅戒問答』と同一の内容と思われる写本である。当写本収録の本書の奥書には「鳳仙乙堂云」とあって、乙堂が本書を評するつもりであったことが分かるが、評論が実際に行われたかは、まだ当該の原本等が未発見であり、詳細は不明である。また、乙堂の奥書には「宝暦六丙子開日之四五日前タル也」[5]とあって、この日時の表記について曖昧な点が残るが、今回、『戒壇指南』本文及びその奥書が確認されたことにより、「開日」とは「開戒日」の意図であった可能性を指摘しておきたい。つまり、同年の冬に乙堂は自身が住持を務めていた桐生山鳳仙寺（現在の群馬県桐生市内に所在）で開戒会（授戒会）を実施したが、その直前に本書の参究を終え、おそらくは説戒などに備えたと思われる。本書及び③『国王授戒作法』④『梵網経古迹記』⑤『戒壇指南』は乙堂自身の戒学への参

究や、その成果を示している。

上記のことから、乙堂に係る手沢本が鳳仙寺山内にあり、それを西有が書写・参究したものと拝察される。

③国王授戒作法

本文書は切紙の一種として宗派内に伝承されているが、当写本に収録されている理由は不明である。また、『国王付授血脈』切紙も合冊されている。②『禅戒問答』も含めて、これらが乙堂による開戒会の準備だったとすれば、本文書が収録されたのは、鳳仙寺の当時の大檀那に対して授戒を行うための作法を確認されたものとも推測可能であろう。

④梵網経古迹記

奥書が無いため来歴等は不明だが、おそらくは乙堂自身の『梵網経』参究経緯を示す文書だと思われる。なお、太賢による『梵網経古迹記』本文への註釈などではなく、乙堂と同時代、どのように『梵網経』が学ばれていたかを記録した内容である。具体的には、従来、『梵網経』の講義などに『梵網経古迹記』が用いられ、その末疏まで多く成立したが、鳳潭（一六五四～一七三八）以降は「法戒疏」[6]を用いることになったと指摘している。

なお、これまでも乙堂と鳳潭との関わりを指摘する見解が権田雷斧によって提示されたが[7]、その根拠の一つが本文書であった可能性も指摘しておきたい。

⑤戒壇指南

奥書に「宝暦六〈丙子〉冬於桐生山開戒之節使小師求賢長老寫之也　乙堂花押」[8]とあって、宝暦六年（一七五六）冬に、桐生山鳳仙寺で開戒会（授戒会）を実施した経緯が示される。その上で、乙堂は法嗣の求賢則聖（保寿寺一一世[9]、同寺は神奈川県小田原市に所在）に、本書を書写させたとある。よって、同年までには成立していた文書であったことが理解できよう。ただし、この奥書の記述のみでは、著者の確定は困難である。また、先に述べたように西有は本書を、乙堂自身の口訣であるとしているが、写本の様子などから判断されたものか。

本書の著者の推定も含めて内容の詳細は後述するが、概しては「開戒会（授戒会）」の加行作法を記した文献である。『戒壇指南』という題の通り、開戒会の戒壇作法を取り仕切る直壇寮及び各加行中の進退に関わる各配役向けの内容ではあるが、「授戒道場」については略記されている。道場作法は戒師の室中に属すると判断されたものか。

また、従来、授戒会関係の作法書として実施年次最古とされてきた指月慧印『開戒会焼香侍者指揮』と同様、加行全体への指南を行っていることになり、奥書の年次が正しければ、本書が実施年次が知られる最も古い授戒会作法書となる。

三、乙堂喚丑に係る『戒壇指南』について

前項⑤で論じたように、本書は直ちに乙堂の著作・口訣であると確定することは難しいが、乙堂自身に戒学参究の意志があったことは、前項②の通り、一丈『禅戒問答』奥書からも明らかであ

り、また、乙堂の本師である隠之道顕（一六六三～一七二九、卍山道白の資）は、その語録などから生前中に何度も授戒会の戒師を務めていることが知られている。[10] よって、その法嗣である乙堂が隠之の授戒会に随喜し、特に卍山道白（一六三六～一七一五）門下に伝承された作法の口訣を伝えていたとしても、全く不思議ではない。

しかし、従来、授戒会に関する口訣等について、卍山の法孫達の記録は、時代的に下ったものと推測される文献が知られた程度かと思われる。また、授戒会作法書で年代が確認出来る限りで現存最古とされたのは、宝暦一〇年（一七六〇）に成立したと伝わる指月慧印（一六八九－一七六四）提唱の『開戒会焼香侍者指揮（以下、指月『開戒会』と略記）』[11] である。そして、指月は大乗寺三三世・智灯照玄（一六六五～一七三九、卍山の資）に参じたともされるため、大乗寺式の授戒会作法を伝えているとも考えられたのである。この度、明らかに卍山系に属する『戒壇指南』が確認されたことにより、その内容の比較対照などを経ることで、指月の作法書についても大乗寺系の内容と齟齬がないか確認可能となった。

更に、大乗寺系の作法書として既知の『授戒会侍者暨直壇指南（以下、『授戒会侍者』と略記）』[12] 及び冒頭の「引」に「大乗侍局幻寓子識」の署名が見え、大乗寺山内に伝承された『禅門大戒直壇指南（以下、『直壇指南』と略記）』（『続曹全』「清規」所収）との同異点にも注目される。

よって、以下には幾つかの項目を検討しながら、『戒壇指南』以外の作法書との対照も進めたい。

①加行日鑑について

本書では、明確に「七日加行」と提示され、現行と同じく一般的な加行日数であるように思えるが、詳細を見ていくと異なっている。そこで、加行中の諸行持も含めて日鑑を示してみたい。

加行前一日・加行に入る前日になるが、授戒会の道場が設置される寺院内外の戒弟（戒子）を、直壇寮が引き連れて侍者寮へ趣いて礼拝を行う。礼拝後、方丈に入り、戒師（和尚）は加行や懺悔の用心について垂誡を示す。そして、方丈を出たら、副寺・侍者・典座の三役を礼拝し、また教授師へも礼拝し、直壇へも礼拝する。なお、これは『仏祖正伝菩薩戒作法』に見える「請拝」には該当せず、おそらくは、各配役への事前の挨拶といった位置づけになると思われる。ただし、本書の傍註では、何度も礼拝することの煩雑さを理由に、この一回で請拝を終わらせるようにも提案している。

一日目・朝課罷に戒師が巡堂している間に、戒弟は坐禅堂に入り役寮への礼拝を行う。更に、堂内で喫粥した後、帰堂する際には出堂の拝も行う。

粥罷には剃髪・沐浴して、加行道場の荘厳を行うことで、七日加行の開始となる。この荘厳について、具体的には「佛祖神ノ三

牌」を拝請し、壇上に安置し、ロウソクや菓子なども供える。

また、三時の諷経（念経）を実施する。

それ以外に、各行持の合間に行うため具体的な時間は定めていないが、毎日の昼夜、一二～一三座ほど「三千仏名」への礼拝を行う。また、暁天の始め（夜間の終わり）に「仏祖礼」を行う。毎朝、洒水のみの「浄道場」を行う。

二日目～四日目・「二日三日四日加行如初日」とし、略記されている。

五日目・昼夜の加行は四日目までと同じだと思われるが、夜間に懺悔（懺悔道場）を行う。

六日目・昼夜の加行は四日目までと同じだと思われるが、伝戒（伝戒道場）を行う。

七日目・朝から昼間での加行は四日目までと同じだと思われ、同日晩間の定鐘罷に授戒（授戒道場）を行う。なお、本書では「加行」という用語の適用について、同日の飯（昼食）後に行う仏祖礼終了でもって「加行満散」としている。よって、本書の内容は八日目にも言及しているが、同日の行持は「加行」に入っておらず、授戒の道場を啓建するまでの準備としての「七日加行」という語句との齟齬はないと見るべきである。

八日目・朝課罷に戒弟は戒師や教授師、諸配役への謝礼・謝誼納金などを行う。

以上である。ここで、本書における加行日鑑の特徴をまとめつつ、他の作法書との比較を行いたい。

ア・「七日加行」を示すが、実態としては前一日と後一日を加え、全体では九日間となっている。ただし、既に論じたように、「加行満散」は七日目の飯後の仏祖礼までとしている。『授戒会侍者』では「七日加行」に後一日を加え、全体では八日間としているが、内容は本書とほぼ同じで、記述としては本書よりも全体的に詳しい。また、『直壇指南』は前一日・後一日が加えられており、本書と同じ日鑑となっている。

なお、指月『開戒会』では全体で七日間に収めるが、前一日を戒弟到着日として定めている。また、六日目「上午ニハ佛祖宗禮ニテ満散」[13]として、仏祖礼で「加行」の満了を示し、その後は授戒道場の荘厳へと進む点は本書などと同じである。

イ・道場の設置について、本書における五日目の懺悔道場、六日目の伝戒道場、七日目の授戒道場とする方法は『授戒会侍者』に同じである。また、『直壇指南』では、四日目を懺悔道場、五日目を伝戒道場、六日目に伝法道場、七日目の授戒道場とあって、「伝法道場」が入ることにより、全体的に相違している。

指月『開戒会』では四日目を懺悔道場、五日目を伝戒道場（ただし、伝戒が無い場合は、懺悔道場は五日目）、六日目を授戒道場とし、七日目には授戒会全体が終わるようにしてい

る。よって、『授戒会侍者』が最も本書と近い。

日程について、本書では「第七日授戒此レタ、一等ノ日限ナリ但シ戒師ノ指揮ニ依リ時ノ宜キヲ行スベシ」としており、やや文意不明な点を残す。しかし、『授戒会侍者』では「凡ソ受戒ノ日限、第五夜懺悔、六夜傳戒、七夜登壇、是一途ノ日限ナリ、但シ戒師ノ指揮ニ隨テ時ノ宜キヲ行ズベシ、若シ傳戒ナキトキハ第六夜懺悔ナリ」[14]として、本書と同じ立場ながら、より詳細な説示を記録している。また『直壇指南』でも本書とほぼ同様の表現で、戒師によりその「日限」を定めるように促している。

ウ・説戒と完戒上堂について、本書では両方とも不明である。ただし、加行前一日に和尚から「加行ノ内二三回モ垂誡有ルベキ」とし、これが実質的な「説戒」を意味していたものか。また、完戒上堂については一切の記載が無い。ただし、乙堂の本師である隠之道顕は複数回の完戒上堂（完戒陞座）等を実施しているため、上堂はあくまでも上堂であり、授戒会の作法に直接含めていない可能性を指摘しておきたい。その傍証として、『授戒会侍者』でも完戒上堂への記載は見えず、同書の加行日鑑でも最終日は「謝拝」「上供諷経」「乞暇拝」等[15]であり、上堂の実施には言及していない。なお、「説戒」については複数の口訣が見られる。『直壇指南』では「説戒」も「完戒上堂」も見られない。

一方、指月『開戒会』は説戒及び完戒上堂への詳細なる作法が見られる。

エ・伝戒と受戒について、既に先行研究でも指摘されることだが[16]、江戸時代に構築された授戒会作法では、出家二衆への伝戒と、四衆への受戒とを一会の中で別個に行っていた。本書でも、伝戒と受戒とを行っている。なお、この方法は、一例として万仞道坦『洞上伝戒弁』（宝暦一一年［一七六一］正月に成立）の段階で、法系の混乱に繋がる可能性が危惧されるなどし[17]、江戸時代末期に編集された授戒会作法書では、授戒の重要性が増した影響か、伝戒を併催することを批判する見解も出されるようになった[18]。しかし、授戒会作法が成立してから間もない本書の段階では、まだ伝戒を実施している。なお、先に挙げたように、『授戒会侍者』では本書と同じ道場の設置順となっているが、『直壇指南』で六日目に伝法道場が入ることで、懺悔道場・伝戒道場が一日早まるなどの違いがある。これは戒師（或いは伝法を行う嗣法師）による判断に基づくバリエーションの違いではあるだろうが、「伝法道場」の導入が『直壇指南』のみ見られることを思う時、おそらく、より原初的な姿を留めているのは本書であるとも推定出来よう。

②各種道場について

現行の授戒会差定では、五日目に懺悔道場、六日目に教授道場・正授道場が実施されるけれども、本文書では既に述べた通り

で、五日目に懺悔道場、六日目に伝戒道場、七日目に授戒道場となる。しかし、伝戒道場・授戒道場については、その詳細を論じていない。おそらくは、作法書として『仏祖正伝菩薩戒作法』が存在し、ほぼそれに準じたものだったからだと推定できよう。ただし、拙論[19]でも論じた通り、現行の正授道場は、本来、一人を相手に行ったであろう『仏祖正伝菩薩戒作法』を、多数に授戒可能なように拡張して行われており、その改変方法には注目せざるを得ないが、本書ではそれは分からない。むしろ、同系統でありながら、道場を論じた『授戒会侍者』にその説明を求めるべきだといえよう。

よって、正授道場・授戒道場は擱いておき、以下には詳細な作法が提示され、また後に西有にも参照された「懺悔道場」及び「捨身供養」作法を論じておきたい。その際、従来より特徴的であったと指摘される指月『開戒会』と、他に『授戒会侍者』『直壇指南』と対照してみたい。

まず、本書の「懺悔道場」の特徴だが、いわゆる「対首懺悔」と呼称[20]される作法である。ただし、現代も用いられる「小罪無量」札などは使われておらず、懺悔帳を作り、それぞれの戒弟が述べた罪状を記載する方法であった。そして、戒弟各位の大罪が無いことを確認しつつ、小罪について詳細を述べさせる手順は、本書及び『授戒会侍者』『直壇指南』に共通する（作法に対する口訣の詳細は若干相違する）。また、その際に「大罪[21]」を持っていた者への対処について、詳細は明示されないが、特別な懺悔をさせる、または受戒を許さない、或いは公儀に通報する、等の措置が執られたものだろうか。なお、本書では詳細は不明だが、『授戒会侍者』では懺悔道場罷に、加行道場の「佛祖神ノ三牌」の前で、戒師・教授師の二師によって懺悔帳が焼却され、『直壇指南』では、授戒道場の教授道場において教授師によって焼却されるといった相違が見られる。

指月『開戒会』では一人一人に罪状を述べさせるけれども、罪の大小は問わず、懺悔帳は懺悔道場後に戒師によって焼却される、等の相違点が見られる。

③捨身供養について

洞門授戒会における捨身供養は、その危険性などから、明治時代に入ると曹洞宗務局の指導によって、ただ戒弟各位が焼香を行うのみとなった[22]。しかし、江戸時代までは戒弟自身の頭頂部、或いは臂などで香を焚き、場合によっては火傷をすることで捨身供養を成立させており、痛みを伴う行法であったと推測される。

その点、本書では「其上ニ云ク今晩捨身當山ノ規矩ニアラザレバ勧ムルニ非ス然レ𪜈深ク大望有ル人ハ強テ制止スルニモ非ス」とあって、基本的には捨身供養を行わないこととしている。ただし、深く大望する人には強いて止めさせることは無いとしており、一応までに捨身供養の際の作法も書かれ、「同戒ノ兄弟観音寶号ヲ唱テ捨身ノ人ヲ右遶スヘシ」とある。

また、本書に最も近いのは『直壇指南』であり、捨身への立場

や作法の内容もほぼ同一である。一方で『授戒会侍者』では、捨身供養を他派の戒儀[23]に依拠して仮に導入されたものとしつつ、『梵網経』「第十六軽戒[24]」を参照して「身臂指」を焼いて仏を供養しなければ、受戒したことにはならないとし、更に永平道元『教授戒文』から「授受戒文ニ云、同道同法同證同行ノ垂範[25]」として戒弟中に捨身香を焼く者、焼かざる者の相違が出ることを批判した。つまり、戒弟の一人も残らず捨身することを求めたのである。そして、本書及び『直壇指南』とは異なり、「頭香」などの作法の詳細を記している。

指月『開戒会』では、希望者への捨身供養を積極的に勧めており、本書などとの相違は明らかである。以上のことから、大乗寺式授戒会作法を考察する際には、各作法書での同異点を慎重に論ずべきことと、指月『開戒会』は独自の作法が見られるため、外して考えるべきことが理解出来た。

四、「大乗寺式授戒会作法」復元の試み

近代以降の曹洞宗の授戒会作法は、江戸時代まで各地で行われていた授戒会作法の影響を受けつつ展開し、いわゆる「七日加行」などの形式が確定した様子を窺うことが出来る。一方で、近世の授戒会（禅戒会・開戒会）は大乗寺二六世・月舟宗胡（一六一八～一六九六）が復興したとも伝えられる。ただし、乙堂『戒壇指南』及び『直壇指南』『授戒会侍者』を概観すると、近代以降の授戒会作法との相違点も見られる。

更に、前項で検討した通り、乙堂『戒壇指南』を中心に、『直壇指南』『授戒会侍者』及び指月『開戒会』を見てみると、大乗寺に関わる授戒会作法書と、指月『開戒会』とでは相違点が際立つことが確認された。

また、既に論じた通り、本書では「捨身供養」を積極的に行わないことを「當山ノ規矩ニアラザレバ」としている。問題はこの「當山」の意味するところで、西有などはこの箇所を引用しつつ、乙堂が住していた鳳仙寺の規矩だと判断したようだが（『傳戒會裏閑話』参照）、『直壇指南』でも「當山ノ一□□（脱字）ニアラザレバ[26]」とあって、同じ趣旨の文だと推定される。つまり、この「當山」とは、鳳仙寺を指しているのではなく（ただし、乙堂が授戒会を開く際に、鳳仙寺にも適用させたという判断自体は可能）、元々の作法が構築されたであろう「大乗寺」を指していると考えるべきで、ここから「大乗寺式授戒会作法」と名付けても良い作法が実在したと判断している。そして、一度構築されれば、その後、近世・近代を通して同作法を改変して行い、現代でもその影響は大きいと言えよう。

この度、『戒壇指南』等三本の作法書が揃ったため、「大乗寺式授戒会作法」の原初形態の復元を試みたい。以下には、作法を特徴付ける用語を挙げつつ検討したい。また、洞門で禅戒会を復興したのが月舟宗胡であったとすれば、その法孫達が伝えた作法は、洞門で最初に確立された「七日加行」であり、それと黄檗派の『弘戒法儀』『授戒日規』を比較することは、両宗派の戒会作

法の違いを明確にすることになるため、以下の議論に加えておきたい。

①「結縁未曽有ノ拜」について

『戒壇指南』及び『直壇指南』において、七日加行の前一日に行われる礼拝である。戒師などを始め、諸寮に挨拶し礼拝した後で、「最後ニ屏房ニ就テ同戒ノ兄弟互ニ結縁未曽有ノ拜有ル可シ」[27]とある通りで、同じ戒会に就く戒弟同士で行った礼拝を指す。

なお、『授戒会侍者』ではこの作法を見ることが出来ない。直壇寮向けとおぼしき指示に、加行に入る前の日付で準備を促し、戒弟の迎え入れなども行うが、「結縁未曽有ノ拜」を行うとはされていない。

本書では本文の註記として、加行前一日に行う礼拝と、「伝戒道場」「授戒道場」の前に行われる「請拝」が機能的に重なっていることを指摘しつつ、加行前一日の礼拝を重視する。一方で、授戒会を広く行う中で重複への批判が多くなり、加行前一日の礼拝全体が省略された可能性も指摘しておきたい。

②「佛祖神ノ三牌」について

この牌は、加行道場の啓建において拝請されるが、現代の授戒会では「證戒尊師十方三世諸佛・三國傳戒祖師諸菩薩・戒源師〇〇〇大和尚」「得戒大師釋迦牟尼如來・羯磨阿闍梨文殊大菩薩・教授阿闍梨彌勒大菩薩」「現戒師〇〇〇大和尚・護戒護法諸天善神菩薩・同學法侶十方諸菩薩」[28]であり、「佛祖神ノ三牌」と見られなくもない様子ではあるが、特に「神」の牌が曖昧ではある。

一方、『授戒会侍者』[29]では以下の通りである。

當寺開山大和尚　宗舜開山大和尚
三國傳燈諸大和尚　永平開山大和尚得戒師堂頭大和尚
當寺二世大和尚　教授師　大和尚

本師釋迦牟尼佛　大聖文殊菩薩
華嚴教主盧舍那佛　大悲觀世音菩薩
當來下生彌勒尊佛　大行普賢菩薩
護法龍天菩薩

日本大小神祇
白山妙理權現

現代の一般的な三牌の書式に比べて、右は「祖師・仏菩薩・諸神」という相違した形態が見られることが確認されよう。そして、本書及び『直壇指南』でも、「佛祖神ノ三牌」と表記するため、同様の書式であったと推定される。更に、指月『開戒会』にも「迎請三牌」とあり、供養膳を捧げる対象に「諸佛ト、諸祖ト、護戒神ト、代受牌ト都テ四膳ナリ」[30]とあって、おそらくは『授戒会侍者』などと共通していた「佛祖神ノ三牌」に、「代受牌」を加えた四牌を祀っていたと思われる。

それから、「佛祖神ノ三牌」は黄檗派の『弘戒法儀』で用いら

れた尊像とも内容が異なっている。特に、菩薩戒授与の戒壇[31]では、正面が「南無華藏教主盧舎那佛〈髙座〉」「南無文殊菩薩爲羯磨師〈髙座〉」「南無彌勒菩薩爲教授師〈髙座〉」で、脇には「開山老和尚爲戒源」「優婆離尊者」「十方諸佛爲尊證師」「十方菩薩爲同學侶」「南山澄照大律師」とあって、牌ではなく、仏菩薩等の尊像を祀った。『弘戒法儀』は宇治の黄檗山萬福寺山内で行われる規模を持った作法とされ[32]、そうであれば「牌」や「軸」ではなく、尊像そのものが祀られていても不思議はないであろう。

そのため、「佛祖神ノ三牌」は、黄檗派とも現代とも異なる大乗寺式授戒会作法独自の位牌の書式として認めることが出来よう。

③加行日限及び懺悔道場・捨身供養・完戒上堂について

加行について、その期限を本書などでは「日限」と表記している。この「日限」自体は珍しい表現ではないが、授戒会の作法書に使ったという点で特徴的である。既に論じたように、七日目に「授戒道場」を開くことは本書を含めた三本に共通しており、指月『開戒会』は六日目に行うため、相違している。

そして、「大乗寺式授戒会作法」では「加行」自体は七日間であるが、本書のように戒弟が集合する機会としての前一日を置く場合があり、更に授戒道場の次の日、解散するための加行後一日も要する全八日、または全九日の日限であったことが確認された。

本書では懺悔・伝戒・授戒の順番に道場を置くが、『直壇指南』では懺悔・伝戒・伝法・授戒となり、式として「伝法」が付加され、しかもその場合には「懺悔」を四日目に行うこととなっている。しかし、「伝法」を入れることは、本来依拠する作法書[33]や式そのものの内容からしても異質のように思われる。つまり、『直壇指南』による独自の改変と見なすことが可能で、本来の道場の設置は本書の通りだったと判断したい。

それから、加行後一日の主たる目的は、戒師を初めとする諸配役に対し、戒弟が謝誼（受戒・伝戒への謝礼）を献じて謝拜を行うことであった。伝戒（受戒）翌日に教授師・戒師への謝拜を行うことは『仏祖正伝菩薩戒作法』に従ったものと思われるが、その本来の作法に謝誼の献納を加えたものである。

また、「懺悔道場」の本来の方法は既に論じた通りで、教授師が戒弟の大罪・小罪の有無を丁寧に聞いて「懺悔帳」に記し、その内容を戒師の確認の上で焼却したものと思われる。この「懺悔帳」に戒弟の罪を記す方法について、典拠となったのは『授戒日規』「初五下午審問遮」項に見える「審戒簿」であろう。沙弥に対して具足戒を授ける前に、問難するが、「一一に問過、詞を按じて名を逐て簿に登す[34]」とあって罪の詳細を尋ねており、更に、書き上がった「審戒簿」は方丈にて和尚に呈し、「審戒の簿、方丈閲して後即ち丙丁を付す[35]」とある。ここから、焼却の有無こそ不明ではあるが、罪を問い、それを名簿に記す様子などは共通している。先に指摘したように大乗寺式授戒会作法の懺悔道場につ

いて「対首懺悔」と称して批判した面山瑞方の見解もあるが、現段階では黄檗派の戒儀を改変して、大乗寺式授戒会作法に採り入れたと見ておきたい。

懺悔に続く捨身供養は、大乗寺系の作法書三本においても相違点が見られたが、基本は「當山ノ規矩」を立てつつ、行わなかったはずである。また、その際に捨身供養を行う授戒作法として想定されていたのは、黄檗派の戒儀であろう。『授戒日規』「初七下午問七遮罪」項[36]では、同日夜の礼懺の後、誓願のある者は意に随って香を焼き、三宝に供養すべきであるとしている。「捨身」という用語や詳細な作法が見えないものの、「捨身供養」と判断される一節である。各行法の実施の有無については、各実施寺院・戒師の判断の余地を残していると見られ、『授戒会侍者』のように敢えて捨身を行う場合も見られた。「懺悔道場」と同様に、黄檗派の戒儀を改変しながら採り入れた可能性を指摘するものである。また、懺悔としての礼仏、いわゆる「三千仏礼仏」の導入について、その独自性の検証をしたかったが、現段階で分かっていることは少ない。一端のみ示せば、黄檗派『授戒日規』では「八十八佛」への礼懺が説かれ[37]、一方で本書などは「三千仏名（三千仏礼仏）」への礼懺を説くため、相違していると思われるが、本書では「歎佛」も確認されており、執筆段階で結論を報告するまでに至らなかったため、今後の課題としたい。

完戒上堂は既に論じたため再論はしないが、本書を含めた大乗寺関係作法書三本に共通して見出すことが出来ない。ただし、本書を書写させた乙堂喚丑の本師・隠之道顕には、繰り返しの完戒示衆・上堂等が見られることに鑑み、授戒会の作法書が論じるべき内容とは異なると考えられていた可能性のみ指摘しておきたい。本書と同時代である指月『開戒会』では口宣されており、上堂の実施自体は否定されない。

④授戒道場への言及

本書及び『直壇指南』では、授戒道場への口訣等で特に見るべきものはない。例外は『授戒会侍者』で、教授道場から正授道場への引込について詳しく述べられ、更に、各道場における作法も詳細である。教授道場も正授道場も、本来は『仏祖正伝菩薩戒作法』に依拠して実施されるが、同作法は基本、一人に対する内容であると思われる。そのため、場合によっては戒弟が数十人から数百人にも及んだ授戒会の各道場を行うための改変は必須であった。既に筆者は、その改変の一端について論じた[38]。今回採り上げた『授戒会侍者』の場合、作法のほとんどは『仏祖正伝菩薩戒作法』に従う内容で、大きな改変はない。ただし十六条戒を受けた後の「登壇」で、複数人が登る場合の注意点が記される程度であった。

よって、これら三本の内容から類推すれば、授戒道場については、『仏祖正伝菩薩戒作法』を基本に請拝・教授道場・正授道場を実施しており、これは作法書の所持者であろう戒師自身の指揮に従ったものと思われる。そのため、本書及び『直壇指南』では

特に道場についての口訣を載せないが、それが作法書本来の様子であったと思われる。

一方で、複数人への同時の授戒を行うことから、作法の一部改変を確認する必要があると判断されたためか、『授戒会侍者』では最小限の口訣を収録したと思われる。

五、結論―『戒壇指南』の著者について

上来、『戒壇指南』について検討してきたが、本論では以下の結論が得られた。

①これまで年次の判明していた授戒会の作法書として最古は、宝暦一〇年実施の指月慧印『開戒会焼香侍者指揮』とされたが、『戒壇指南』は宝暦六年であり、わずかだが更新された。

②『戒壇指南』は乙堂喚丑に係る写本であり、卍山道白―隠之道顕―乙堂という法系の関係から、大乗寺で構築された授戒会作法を受けたものであると判断できる。

③『戒壇指南』及び『禅門大戒直壇指南』『授戒会侍者暨直壇指南』の三本は大乗寺に深く関わり、それらの比較を通して「大乗寺式授戒会作法」原型の復元を試みつつ、黄檗派の戒儀と比較した。

以上である。そこで、この結果を受けて、改めて『戒壇指南』の著者について検討しておきたい。まず、既に論じたように、本書の奥書からは、乙堂喚丑が法嗣の求賢則聖に書写させて、自らの署名と花押を記した経緯は理解出来るが、これのみでは乙堂を本書の著者だと定めることは出来ない。理由は、別に原本があって、乙堂が住していた鳳仙寺で開く授戒会を前に書写させたのみである可能性を払拭出来ないためである。しかも、『戒壇指南』と『直壇指南』は使われる用語や言い回しなどが極めて類似しており、これらに共通の原本、あるいは原型となる作法があったと見るのが自然であり、その仮定の下、③の検討結果を得たのである。

ただし、筆者はその原型となる資料は未見である。手続きとしては、その原型となる資料が発見され、『戒壇指南』との比較の結果、何らかの相違点があれば、乙堂自身の改変や口訣と見なし、本書を乙堂の著作であると確定可能になるといえよう。現段階では、『戒壇指南』は乙堂に係る授戒会作法書としかいえないのである。

また、書名の問題も残る。今回採り上げた大乗寺系の作法書三本中、二本は『直壇指南』の名称を冠し、本書のみ『戒壇指南』となっている。わずかな差異であるが、原型となる文献を探る際の手掛かりになるかもしれない。

それから、西有穆山に関わる写本『金剛集録』を通して、乙堂が授戒会を開く前に綿密な準備をしていたことが推定でき、更には乙堂の立場が西有自身の戒学形成に影響した可能性があると判明したことを挙げておきたい。

今後は、西有『傳戒會裡閑話』等の分析を通して、西有自身の授戒会作法に関する立場や、乙堂からの影響などを精確に検討し

たいと思っている。

註

(1) 『金剛集録』六七丁表
(2) 『金剛集録』四六丁裏
(3) 『金剛集録』九三丁裏
(4) 『傳戒會裏閑話』参照、『金剛集録』四丁裏・五丁裏
(5) 『禅戒問答續』「奥書」参照、『金剛集録』三七丁表
(6) 法蔵『梵網経菩薩戒本疏』を指すと思われる。
(7) 『正法眼蔵続紘講議』巻三・六〇丁表頭註参照
(8) 『金剛集録』四六丁表
(9) 『曹全』「大系譜」一七六頁参照
(10) 菅原二〇一三
(11) 『続曹全』「清規」所収。指月による提唱を宝暦一〇年（一七六〇）とする見解は、光地英学氏による解題（『曹全』「解題」四六五頁下段）を参照した。
(12) 『曹全』「清規」所収。なお、同書では仏祖礼の対象とする祖師に、月舟宗胡・卍山道白・隠之道顕などの名前が見える（『曹全』「清規」八〇七頁下段）ため、本書同様に隠之道顕系で伝えた作法と推定され、本書との同異点に注目される。
(13) 『続曹全』「清規」四八二頁上段
(14) 『曹全』「清規」八〇四頁上～下段
(15) 『曹全』「清規」八〇六～八〇七頁
(16) 『授戒会の研究』三四一頁
(17) 『洞上伝戒弁』、『曹全』「禅戒」四三七頁下段
(18) 『戸羅會中内口傳』一五丁裏～一六丁表
(19) 菅原二〇二〇
(20) 菅原二〇二一及び面山瑞方『永福面山和尚説戒』「加行ノ因縁」項、『曹全』「禅戒」一七二頁下段～一七三頁下段参照。面山は「対首懺悔」について、本来の律蔵などに見られる作法とは異なることを批判する。
(21) 「大罪」の意味するところの詳細は不明だが、黄檗派『弘戒法儀』や、日本の天台宗・浄土宗の受戒作法では、菩薩戒でも「七逆罪」の者に受戒を許さないとの見解もあるため、それに準じたか。ただし、曹洞宗の場合、『正法眼蔵随聞記』巻二（『全集』七・六九頁）で、道元が懐奘に対して述べたように、明庵栄西が定めたこととして、懺悔さえすれば七逆罪の者にでも戒を受けさせるとしている。その意味では、「大罪」をしている者には、特別に懺悔をさせた可能性なども考えられる。
(22) 曹洞宗務局普達第二十号（明治八年六月一五日）（『〈明治八年〉曹洞宗務局普達全書』四一丁）にて、捨身供養の一作法である「頭香」を差し止めし、戒弟各位に焼香させる方法に転換された。
(23) おそらくは黄檗派『弘戒法儀』を指していると思われる。
(24) 『大正蔵』二四・一〇〇六a
(25) 『曹全』「清規」七九七頁上段参照。典拠となった永平道元『教授戒文』は、「第六不説過」への提唱（『全集』六・二一六頁）が参照されている。
(26) 『続曹全』「清規」四九七頁上段、『直壇指南』の底本では文字が判別できなかったようだが、『戒壇指南』を参照すれば、欠字の部分は「規矩」が該当すると思われる。
(27) 『戒壇指南』、『金剛集録』四〇丁裏
(28) 『昭和改訂曹洞宗行持軌範』二三一～二三二頁、各牌は本来の配置

愛知学院大学　教養部紀要　第69巻第1・2合併号

を並べ直して中央・右・左の順で記載した。

(29)『曹全』「清規」八〇七頁上段参照

(30)『続曹全』「清規」四七五頁上段

(31)『授戒日規』「初八日授菩薩戒設位式」参照、『授戒日規』一〇丁裏

(32)『戒会須知』二八頁参照

(33)伝法は作法書『伝法室内式』を用いて行うことが一般的である。道場の荘厳などで、伝戒作法に類似した点が無いとはいわないが、一致しているわけではない。

(34)『授戒日規』七丁表

(35)『授戒日規』七丁表

(36)『授戒日規』一〇丁表参照

(37)『授戒日規』「夜分禮懺」項他、『授戒日規』二丁裏

(38)菅原二〇二〇

参考文献（一次資料）

隠元隆琦編正『弘戒法儀』『授戒日規』合冊本、刊記無し・江戸期版本と推定、丁数は各本で一から付されているため、その指示に従った。著者不明『尸羅會中内口傳』愛知学院大学図書館情報センター所蔵・禅研究所配架（請求番号・188.8/02900）

乙堂喚丑著、西有穆山・権田雷斧校閲『正法眼蔵続絃講義』巻三、貝葉書院・一八九六年、版本は「講義」と題されるが、実際には「講議」表記が正しいため、引用時には『正法眼蔵続絃講議』と記載した。

曹洞宗務局編『〈自明治五年・至明治十一年〉曹洞宗両本山普達全書』曹洞宗務局、複数年の普達が合冊されており、引用時には当該年度のみを記載し、丁数などを示した。

山本悦心編『戒会須知』黄檗堂・一九三六年

曹洞宗宗務庁編『昭和改訂曹洞宗行持軌範』曹洞宗宗務庁・一九六三年版

『大正新修大蔵経』を参照。引用に際しては、『大正蔵』巻〇・〇〇頁と略記して巻数・頁数を示し、段数をアルファベットで末尾に付した。

『曹洞宗全書』『続曹洞宗全書』（曹洞宗全書刊行会）を参照。引用時には『曹全』『続曹全』「〇〇」〇〇頁〇段とし、巻号と頁数のみで略記している。一々断らないが、一部引用文は筆者が訓読した。

永平道元の著作は春秋社『道元禅師全集』（全七巻）を参照。引用時には『全集〇』〇〇頁とし、巻号と頁数のみで略記している。

参考文献（二次資料）

曹洞宗宗務庁編『授戒会の研究』曹洞宗宗務庁・一九八五年

菅原研州「隠之道顕禅師の研究（一）」、『曹洞宗総合研究センター学術大会紀要』第一四回・二〇一三年、菅原二〇一三

菅原研州「洞門授戒会作法成立の一考察」、『愛知学院大学禅研究所紀要』四八号・二〇二〇年、菅原二〇二〇

菅原研州「「禅戒一如」と「禅戒双修」―附録『三國傳來戒壇記』『（仮題）仏戒相承論』翻刻資料―」、『愛知学院大学禅研究所紀要』四九号・二〇二一年、菅原二〇二一

附録　『戒壇指南』翻刻資料

※凡例

・この資料は、『金剛集録』写本所収の『戒壇指南』を全文翻刻したものである。解題は本論を参照されたい。
・丁数は『戒壇指南』該当分となっている。
・翻刻時の行数・字数などは原典に従った。
・【　】内の数字・カナで丁数と表裏を略記した。
・漢字の字体は概ね原典に従った。
・頭註は翻刻文の下部に移動し掲載した。
・傍点や踊り字は原文の通りに反映させた
・確認された誤字は翻刻文の下部に指摘した。

【40オ】

○戒壇指南

○時至レバ加行前一日藥石後直壇寺中外来ノ戒子ヲ引テ侍者寮ニ到ル時ニ侍者和尚ヲ請シテ拜セシム戒子展具三拜此時ワ只拜ノミ請ノ〈然ニ式文ニ先請戒儀アリ此儀式致語等ハ必行スベシ今請ニ詞无シトハ只前ノ相見ナリ然レ𪜈両度ニセンヨリ此時ニ本儀ヲ行フベシ是レ律文ト乞戒勧発勝思ノ時ナリ又加行懺悔ノ用心ヲモ教ユベシ〉詞无シ具上座ス此時和尚加行懺悔等ノ用心ヲ垂誡ス此ノ垂誡ノ儀侍者兼テ方丈ニ密啓有ル可シ總テ加行ノ内二三囲モ垂誡有ルベキ羊ニ内請スベシ垂誡了テ戒子頓拜シテ具ヲ収テ方丈ヲ出ツレハ直壇戒子ヲ茶堂ニ引テ副寺侍者

【40ウ】

典座ノ三役ヲ一房ニ拜セシム次ニ衆寮ニ引テ知客ヲ拜セシム教授師モ此時拜ス但寮ノ便宜ニ依ルヘシ次ニ直壇ヲ拜セシム此拜ノ儀侍者兼テ戒頭ノ人ニ内意有ル可シ最後ニ屏房ニ就テ同戒ノ兄弟互ニ結縁未曽有ノ拜有ル可シ

○第一日朝課罷和尚巡堂ノ内直壇寺中外来ノ戒子ヲ引テ禪室ニ至ツテ拜セシム若シ堂中ニモ戒子有レバ此時一同ニ拜スルナリ是レ役寮ノ拜ナリ堂中ノ戒子ハ喫粥歸堂問訊ノ後又出堂ノ拜有ル可シ次ニ粥罷剃髪沐浴加行ノ道場ヲ

【41オ】

莊嚴ス是レ七日加行ノ始ナリ○佛祖神ノ三牌ヲ安ス莊嚴了ラハ戒頭三人威儀ヲ具シ右ノ三牌ヲ拜請シ壇上ニ安置シ侍者寮ニ報シテナラシスベシ菓子ハ三具ヘ盛リ羊ハ最初一度懺悔ノ日一度満戒ノ日一度都合三囲ナリ三ツ菓子洒水ハ歎佛一座毎ニ改ムルナリ爛焼ハ佛前ニ一丁主讃ハ前ニ一丁ナリ七日加行ハ中堅ク持齋スベシ○加行道場ノ維那ハ戒頭或ハ其中ノ老僧ヲ定

ム法式進退ノ威儀ハ維那ノ教喩ナリ總メノ
指揮ハ直壇ニ任ス直壇ハ夜ル授者休息ノ後
【41ウ】
火之用心等ヲナシ長壽香一本半ホトニ立テ暁天迠
テ不卧ナリ時至レバ直壇湯ヲワカシ戒子ヲ起ス戒
子威儀ヲ具シ著衣喫湯了テ毎朝巡堂焼香
心経點讀ス但焼香ワ戒頭一人ナリ看寮ハアトニ
ヲ茶碗ヲシモツ可シ直壇ハ四角ヲ持シテ巡堂ヲ引
キ教ユ香炉ハ戒子ノ中少キ者呑持スベシ巡堂了
テ直ニ礼讃ナリ但シ甚ハ湯无シ甚夜虫過キ
線香二本程ト禮佛シ冬ハ隨虫三本ノ後又二本
ホト禮佛シ了テ休也暁天ハ早キヲヨシトス禮
佛少モ間断有ル時ワ直壇或ハ維那磬ヲ打チ衆
【42オ】
ヲ集ム可シ正ニ是レ放身捨命ノ時部禮讃ハタ
イテイ晝夜十二三座其間ニ三千佛名ヲ拜ス
ベシ總テ戒壇中施主有ル時ハ直壇典座侍者
寮ニ告名單ニ貼ス可シ抑礼讃ノ次第ハ毎日暁天
ノ始メ夜間ノ終リ盧舎那佛ヨリ得戒師同戒ノ
兄弟各三拜是レ維那唱ルナリ毎朝一人洒水
斗リニテ浄道場ヲ行シ逸堂一匝スルナリ晝
夜共ニ普門品ヲ誦ス可シ三時ノ念經ハ殿鐘一
會ノ中ニ礼讃ヲヤメ威儀調ヘ待タシム可シ

※受の誤記

○二日三日四日加行如初日
【42ウ】
○第五日今晩ハ懺悔ナリ沐浴清浄ニシテ至誠（懺悔畢而捨身也）
ニ懺悔スヘシ
○第六日傳戒
○第七日授戒此レタ、一等ノ日限ナリ但シ戒師
ノ指揮ニ依リ時ノ宜キヲ行スベシ懺悔ノ當日
ニ粥後或ハ飯後受者方丈ニ上テ焼香但シコレ
ハ人々ナリ請拜致語只戒頭一人ノミ也傳戒
授戒何レモ當日々々ニ剃髪沐浴ス可シ懺悔
ハ開・山・ノ前・或・禅・堂・ナ・リ・聖僧燭一丁硯筥并ニ
鈴一箇ヲ安ス戒頭ヨリ一人宛聖僧前ニ至テ
【43オ】
焼香三拜シテ其座具ヲ引キ囲シ教授師ニ向イ
三拜了テ胡跪合掌ス无始以来業障悉至
誠ニ懺悔シ了テ頓拜シ了テ退此時鈴ノ鳴ヲ聞
テ第二位ノ人則上ル次如是懺悔帳ハ侍者
兼白・打調スベシ作法ハ紙一枚ヲ横折ニシテ片
面ニ三人宛腸次ニ列書ス若シ傳戒別日ナ
ラハ懺悔帳ニ二冊ヲ製ス可シ在家人ハ先ニテ
モ可ナリ教授師用心ニ云受者合掌ノ向時
先此方ヨリ大・罪・ノ・有・無・ヲ・尋・ヌ・ベ・シ・大罪无キ
時ハ无シト書シ小・罪・ハ・品・ニ・依・テ・記スヘシ懺悔了

※日の誤記

【43ウ】
ラハ教授師懺悔帳ヲ戒師照覧ニ備フ戒師
了細ニ点検シ了テ大罪無キ時ハ帳ヲ封シ印ヲ
押シ教授師ニ返ス然シテ教授師戒子ノ圓生
中ニ出テ各々懺悔相違ナキ由ヲ告ケ其上ニ
云ク今晩捨身當山ノ規矩ニアラザレバ勧ムルニ非
ス然レ𪜈深ク大望有ル人ハ強テ制止スルニモ非ス
捨身ノ中同戒ノ兄弟観音寶号ヲ唱テ捨
身ノ人ヲ右遶スヘシ
○第六日傳戒ノ人剃髪沐浴晩間巡堂焼香
侍者寮ニ至テ定鐘ヲ待ツ時至レハ教授寮ニ
【44オ】
至テ焼香礼拝致語有リ
○第七日此日受者粥罷剃髪沐浴了テ浄水
ヲ献シ戒壇中施主家ノ為ニ普門品ニテ行道
囲向ス行道ノ位ハ則礼讃位ナリ囲向ノ文ニ云上
來譜誦當塗王經所集功德囲向戒壇結
縁諸檀道侶各々品位荘厳報地伏願存
者福壽増長安寧亡者離苦往生浄土者
飯後礼讃一座了テ盧舎那佛ヨリ同戒兄
弟迨テ各々三拝シ了テ加行満散ス次ニナラ
シスベシ晩間巡堂焼香侍者寮ニ至テ定鐘ヲ
【44ウ】

※子細の誤記

・捨身法

待ツ時至レハ教授寮ニ至テ燈香礼拝致語（竜按恐焼乎）
アリ巡堂ノ焼香モ人々也故ニ香炉モ二ツ也
○第八日朝課罷テ和尚方丈巡堂ハ鑒寺ツ
トムルナリ直壇戒子ヲ侍者（○引テ）寮ニ至レバ侍者時
ニ和尚ヲ請シテ謝礼ヲ受ケシム此時傳戒ノ人ア
ラバ傳戒々頭ト受戒ノ戒頭ト両人衆ヲ出テ
焼香各謝誼ヲ献シ衆ニ入レハ諸戒子雷同
九拝アリ次ニ教授師役寮直壇等ニ謝礼ス
但シ拝ノ次第ハ寮ノ便宜ニ依テ最初ノ如シ教
授師ヘハ此時ニ謝儀ヲ納テ禮三拝ス謝儀ハ
【45オ】
傳戒受戒共ニ一房ナリ直壇侍者ヘモ謝
儀ヲ納テ禮三拝スベシ粥後小開静ノ後諸
戒子禅堂ニ至テ拝スル〓如最初諸寮ノ拝
了テ戒子粥時ヨリ報恩ノ為メニ給侍等ヲ勤ム
齊時ノ拝ハ傳戒々頭受戒ノ戒頭両人出
スベシ但シ遠方ノ僧多キ時ハ二時飯也本尊
上供大衆諷經ナリ開山和尚ヘモ献供スコレハ
齋辨シ次第戒頭一人ニテ諷經之行茶ノ時加
行中ノ菓子ヲ大衆一同ニ行クベシ戒壇中ノ入
用ヲ預メ知庫寮典座寮副寺寮ヱ尋ネ
【45ウ】
結筭シテ大殿ニ貼スヘシ得戒師ヱハ報恩金各

々隨分可納是レハ戒頭ノ人諸戒子ト示談ア
ルベシ在家ハ在家ニテ示談有ルベシ傳戒ノ人ハ
別ニ納ム可シ尤モ教授師直壇侍者ヱノ謝
儀ハ戒壇入用ニ入レテ結算スベシ謝齋金ハ
衆ノ夛少ニヨリ戒頭ノ人落子ヲ掛テ典座寮　※絡子の誤記
へ納ム可シ戒師ヘノ報恩金ハ必ス結算ニ入レ　○結算ニ加ヘス　※ルの脱字
ヘカラス

戒壇役單

【46オ】

啓師　某甲
主讃　某甲
手磬　某甲
木魚　某甲
維那　某甲

宝暦六〈丙子〉冬於桐生山開戒之節使小師
求賢長老寫之也　乙堂花押

【46ウ】

明治三十歳四月吉辰
小子童龍謹寫

執　筆　者　紹　介

山　口　　均（本学客員教授 …… 英　　語）
YAMAGUCHI　Hitoshi

鷲　嶽　正　道（本学教授…… 英　　語）
WASHITAKE　Masamichi

糸 井 川　　修（本学准教授…… ド イ ツ語）
ITOIGAWA　Osamu

菅　原　研　州（本学准教授…… 宗　教　学）
SUGAWARA　Kenshū

教養教育研究会委員

（会長）佐々木　真　　（副会長）文　嬉　眞

（会計）※内　田　康　弘

青　山　健　太　　※浅　原　正　和　　石　川　雅　健

大　松　久　規　　北　村　伊都子　　香ノ木　隆　臣

※柴　田　哲　雄　　※杉　浦　克　哉　　塚　本　早　織

堀　田　敏　幸　　山　名　賢　治

※本号編集委員

編集後記

『教養部紀要』第69巻第1号・第2号合併号をお届けいたします。皆様のご協力のおかげで、本号には論文4編を掲載することができました。著者の先生方には、ご専門領域の貴重な論文を本号に寄稿してくださったことにつきまして、心よりお礼申し上げます。また、この場をお借りして、ご多忙の折、編集業務に携わってくださった編集委員の先生方にも深く感謝申し上げます。

今後も『教養部紀要』が先生方の幅広い分野でのご研究の成果を発表する場となり、ますます充実したものになりますことを祈念いたします。（内田記）

愛知学院大学教養教育研究会会則

第　1　条　本会は愛知学院大学教養教育研究会と称する。

第　2　条　本会の事務所は愛知学院大学教養部に置く。

第　3　条　本会は大学設立の趣旨に則り、人文科学・社会科学・自然科学・語学・健康総合科学等の、教養教育に関する諸学の研究成果ならびに教育成果の発表を通じ、学問の水準を維持、向上せしめ教育及び社会一般に寄与することを目的とする。

第　4　条　本会の会員は次の通りとする。

⑴　正 会 員　本大学の教養部専任教員とする。

⑵　準 会 員　本大学の在学生とする。

⑶　賛助会員　本大学の卒業生及び本会の趣旨に賛同し、会長の承認を得た者とする。

第　5　条　本会は第3条の目的を達成するために次の事業を行う。

⑴　機関誌「愛知学院大学論叢教養部紀要」の刊行

⑵　研究会、講演会、討論会等の開催

⑶　その他本会の目的を達成するために必要と認められる事業

第　6　条「愛知学院大学論叢教養部紀要」は原則として毎年3回発行し、会員に配布する。

第　7　条　本会は教養教育研究会委員会を置き、委員は次の者で構成する。

⑴　会　　長　　1名

⑵　副 会 長　　1名

⑶　委　　員　　12名

⑷　会　　計　　1名

2　会長は学長これを委嘱する。

3　委員は正会員の互選により、人文科学・社会科学・自然科学・第1外国語・第2外国語および健康総合科学の各系列より2名あて選出する。委員の任期は2年とする。ただし、再任を妨げない。

4　副会長及び会計は委員の互選により、会長がこれを委嘱する。

第　8　条　会長は本会を代表し、会務を統轄する。

2　副会長は会長を補佐し、会務を掌る。

3　委員は委員会を構成し、本会の企画運営にあたる。

第　9　条　会長は委員会を招集し、その議長となる。

第　10　条　会長は本会の会務執行のため、必要あるときは実行委員会を委嘱することがある。

第　11　条　会員は毎年度始めにおいて会費を納入する。

2　新入会員は入会金を納付するものとする。

第　12　条　本会の運営費は、会員の納付する会費、愛知学院大学からの補助金または有志からの寄付金およびその他の収入をもってこれにあてる。

第　13　条　本会の会計は4月に始まり、翌年3月に終る。

第　14　条　本会の会則の改正は正会員の3分の2以上の賛成をもって成立する。

付　　則

本会則は、昭和32年4月1日に制定し、即日施行する。

本会則は、昭和53年2月6日に改正し、即日施行する。

本会則は、昭和57年3月24日に改正し、同年4月1日より施行する。

本会則は、昭和58年６月17日に改正し、即日施行する。
本会則は、昭和63年４月１日に改正し、即日施行する。
本会則は、平成２年７月６日に改正し、同年４月１日より施行する。
本会則は、平成８年７月19日に改正し、即日施行する。
本会則は、平成11年12月17日に改正し、翌年４月１日より施行する。
本会則は、平成20年12月12日に改正し、翌年４月１日より施行する。
本会則の施行により愛知学院大学一般教育研究会会則を廃止する。
本会則は、平成27年４月１日に改正し、即日施行する。

愛知学院大学論叢「教養部紀要」投稿規程

1988年４月１日成立・実施

〔投稿資格〕
第　一　条　この会誌に投稿する資格をもつ者は、原則として教養教育研究会正会員とする。
〔転載の禁止〕
第　二　条　他の雑誌に掲載された論文・資料・翻訳・書評などは、これを採用しない。
〔原稿の形式〕
第　三　条　投稿に際しては、次の要領に従って本文、図および表を作成する。
⑴　原稿は、電子媒体による入稿とする。（プリントアウトを１部添付する）
⑵　原稿の量はおおむね16,000字以内とする。
⑶　本文の前に、別紙で、次の３項を次の順序で付する。
(i)　和文の題目および執筆者名。
(ii)　欧文の題目および執筆者名。
(iii)　㈠　論文・資料・翻訳・書評などの区別
㈡　その論文・資料・翻訳・書評などが属する専門領域名。
ただし、ここにいう専門領域は、人文・社会・自然・外国語・健康総合科学の５部門に区別する。
㈢　教授・准教授・講師・助教・外国人教師など別
⑷　図・表・写真は、印刷するのに十分な画質のもの（原則としてモノクロ）を、本文の該当箇所に挿入する。
〔原稿の申込み〕
第　四　条　投稿希望者は、教養教育研究会委員会（以下、委員会と称す）の公示する期限までに、委員会の提示する申し込み用紙に氏名を記入する。
ただし、申し込み者が所定の数に達しないか、またはそれを越える場合には、委員会がこれを調整する。
〔提出期限〕
第　五　条　投稿は委員会の定める提出期限までにこれを行う。締切り日以後に提出された原稿は掲載されないことがある。
〔原稿組版の制限〕
第　六　条　図版・カラー写真などの掲載により一般の経費より多くかかる場合は、その必要性を各号の編集

責任者に申し出て委員会を開催して審議し、承認を得ることとする。なお、承認を得られず掲載を希望する場合、その費用を別途に個人負担とする。

〔原稿修正の制限〕

第　七　条　投稿後の原稿の修正は、原則としてこれを行わないものとする。やむをえない場合は初校において修正し、その範囲は最小限度にとどめる。大幅な修正の結果、印刷費が追加されるときは追加費用を個人負担とすることがある。

〔校　　正〕

第　八　条　校正は原則として第3校までとし、本文については執筆者がこれに当たり、表紙・奥付その他については編集委員がこれに当たる。

〔抜き刷り〕

第　九　条　抜き刷りは、論文・資料・翻訳・書評など各1篇につき50部までを無料とする。これを越える分については実費を執筆者の負担とする。50部以上を要する場合には、執筆者はその必要全部数を原稿の表紙に朱記する。

〔掲載論文等の複製権・公衆送信権〕

第　十　条　この会誌に掲載された論文等の電子化および公開に関わる複製権および公衆送信権は、教養教育研究会に属するものとする。

ただし、掲載された論文などの執筆者が他の機関への転載もしくは複製権または公衆送信権の行使を申し出た場合は、正当な理由がない限り、教養教育研究会はこれを拒むことはできない。

付　　則

一、本規定の改正には、教養教育研究会正会員の3分の2以上の賛成を要する。
二、本規定は、1988年4月1日に成立し、即日施行する。
三、本規定は、1996年7月19日に改正し、即日施行する。
四、本規定は、1999年12月17日に改正し、翌年4月1日より施行する。
五、本規定は、2003年11月21日に改正し、即日施行する。
六、本規定は、2005年4月22日に改正し、即日施行する。
七、本規定は、2007年11月16日に改正し、即日施行する。
八、本規程は、2018年9月21日に改正し、即日施行する。

申し合わせ（教養部会 2010. 7. 16）

●第一条の「投稿する資格を持つ者」には、以下の非正会員を含む。
⑴　正会員との共同執筆による投稿
⑵　正会員が推薦する本学教養部の非常勤講師で、本務校をもたない人の投稿
⑶　元正会員で、本務校をもたない人の投稿

●上記⑴⑵⑶に該当する投稿希望者がある場合は、担当編集委員が投稿の可否を決定し、投稿希望者に通知する。担当編集委員で判断できない場合には、教養教育研究会委員会を開いて投稿の可否を決定する。

●投稿原稿の掲載に際しては、⑴の場合の原稿料は1篇分とし、⑵⑶の場合の原稿料は支払われない。また、⑴⑵⑶いずれの場合も抜き刷り50部までは無料とする。

●投稿者は、第三条の〔原稿の形式〕を厳守し、第四条の〔原稿の申し込み〕の時に委員会の提示する「投稿票」用紙に必要事項を記入のうえ添付して投稿する。

●投稿された原稿について担当編集委員から検討の申し出があった場合は教養教育研究会委員会を開き、委員会名において訂正を依頼したり投稿を断ることがある。

●第六条「図版・カラー写真の掲載」については、紀要作成予算の範囲内と見なされる場合、その採否は紀要編集委員の決議にゆだねるものとする。ただし、予算の範囲を逸脱する、あるいは採否の決議が困難の場合は教養教育研究会委員会を開催して、決定することとする。

（注）教養教育研究会が本会正会員の著書・論文等について書評を依頼する場合は、原稿料を支払うこととする。

令和４年１月19日　印 刷
令和４年１月26日　発 行

（非売品）

愛知学院大学論叢
教養部紀要第69巻
第１・２合併号（通巻第199号）

編集責任者
佐 々 木　　真

発行者　愛 知 学 院 大 学
教 養 教 育 研 究 会
〒470–0195
愛知県日進市岩崎町阿良池12
電　話 〈0561〉(73) 1111（代表）

印刷所　株 式 会 社　あ る む
電　話 〈052〉(332) 0861

THE JOURNAL OF AICHI GAKUIN UNIVERSITY

Humanities & Sciences

Vol. 69 No. 1, 2
(Whole Number 199)

CONTENTS

Articles

Hitoshi YAMAGUCHI：Go Courses in the Age of COVID-19 (1)

Masamichi WASHITAKE：Reading Materials for Learning to Read Scientific Papers:
A Suggestion from A Systemic Functional Perspective (19)

Osamu ITOIGAWA：Über die Literatur von Bertha von Suttner:
Eine Untersuchung von der Literaturkritik in „Maschinenzeitalter“ (35)

Kenshū SUGAWARA：Research on “Kaidanshinan” Related to Itsudo Kanchu (70)

Published
by

Aichi Gakuin University
Nagoya, Japan
2022